

熊本地震記録集  
熊本市現代美術館

地震のあとで  
After the Earthquake

美術館を、美術館として開ける。

CA M I K  
After the Earthquake  
地震のあとで

熊本地震記録集  
熊本市現代美術館





川内倫子 川が私を受け入れてくれた

## 熊本地震と美術館

熊本市現代美術館

館長 桜井 武

### 震災、学んだこと、そして創造的復興へ

熊本地震から2年が経過します。今なお復旧、再建を待つ多くの地域があります。熊本城も崩れた石垣を含めた完全復興までには、20年を待たねばなりません。最大震度7が2度も襲った激烈な地震でありましたが、東日本大震災や阪神淡路大震災に比べ、多くの相違点がありました。まず火災発生数が極めて少なかったこと。その理由は、熊本では阪神大震災後にガス管の耐震化が進み、さらに震度5程度を感知するとガス供給を自動停止する装置が広まっていた。それがガス漏れによる火災を防ぎました。また「通電火災」が少なかったことも特筆されます。つまり熊本はインフラの整備や強化等、阪神や東日本の大震災から多くを学んでいたのです。

熊本市中心部の商店街を見ますと、その復旧復興は驚異的に進行しています。この街なかにある熊本市現代美術館も被災して混乱の時期がありました。当初、より正確に全体の状況を把握するよう情報収集に努め、その後の復興への流れに繋げるよう全力を挙げました。

### 地中奥深くからの得体の知れない響き

4月14日の前震、16日の本震の後、数千回に及ぶ余震のさ中、多くの熊本の人々が感じていたのは、得体の知れない「生き物」と同居し始めたという、そんな恐怖であり戦きでした。人間が自然を征服し統治する存在でないことを思い知らされたと言ってもいいでしょう。

前震があった4月14日深夜の真っ暗闇の熊本城では、一群のカラスが大集結し、けたたましい叫び声をあげていました。その翌日、大集団は消えていました。恐らく、彼等カラスはわれわれ人間と異なる感覚をもち、次にやって来る本震を正確に予感していたと思われる。実際その翌日の深夜に本震が襲い、周知のように、前震の時には熊本城の全容はまだ形を成していましたが、本震では非常に大きな打撃を蒙ることになりました。

### 被災した美術館とエッシャー展

前震・本震の前、当館ではオランダの画家エッシャーを軸にした「だまし絵王エッシャーの挑戦状―ダリ、マグリット、福田繁雄から現代のイリュージョニストまで―」が開始されたばかりであり、この企画は総点数150点を超える大型展でした。当展は、初日に異例の600人、翌日には800人という観客が訪れていました。しかし5日目で前震に見まわれ、順調に進み出した展覧会を中断せざるを得なくなったのです。

翌早朝、美術館にたどり着くと、館内は天井や棚から書籍を含め大小さまざまな物が落ち、凄惨な状態を見せていました。天井そのものが落ちることはありませんでしたが、パネルの部分や、非常に細かな部品が一挙に落下していました。熊本市現代美術館は2002年に開館、従って10年以上経ち、その間に積もったほこりも一挙に落ちたわけです。吊り天井や間接照明といったスタイリッシュな内装デザインは、シンプルなものに比べてはるかに脆弱であることが示されました。しかし私たち美術館の建築構造そのものは無事でした。

その他、市民が自由に出入りでき、寛ぎの場でもあるホームギャラリーの天井に亀裂が生じましたが、その天井に設置されたジェームズ・タレルの光の作品は無傷でした。また草間彌生、宮島達男らの永久設置作品も無事。頻発する余震の合間を縫って緊急工事、施設の安全確保確認が行われました。

ここで重要であったのは、業者との日頃の密接な関係性、そして緊急時の独自で決済できる資金でした。震災時の大混乱時に早急に工事の手配をするということはなかなか困難で、チャンスを外したら当分業者はつかまりません。それから、非常時に多く必要とするお金を、どのように工面するかという問題が生じます。私たちは、既存の基金の取り崩し等の措置を取り、2週間以内には大体クリアにすることができました。

### 美術館としての再開

4月14日の前震以後閉館していた美術館は、5

月11日に館内のチェックをして安全を確認した後、ホームギャラリー、フリースペース、ミュージアムショップ、子育てひろば等が再開されました。開館することによって、子育てひろばでの子どもに関する相談、書籍が備えられたホームギャラリーでの図書利用が可能となりました。それから地震前は毎晩行われていたピアノコンサートが再開。この時期に音楽が館内に鳴り響くことに多くの人々が感銘を受けました。街なかで開館を待ち望む人たちが大勢いたことを知り、私たちは勇気づけられたのです。暗闇の中で人々は希望の光を求めていたといえましょう。

その翌週の18日には、被害を免れた小展示室、ギャラリーⅢと井手宣通記念ギャラリーにて、特別仕立てのエッシャー展によって、再開にこぎつけました。開館初日に人々が列を成しているのを見て、街なかにある美術館として多くの市民県民に再開が待たれていたのを実感しました。

一時はゴーストタウン化した街なかにある美術館として、再開それ自体が明るいニュースとなりました。この無料公開の特別展は、一か月弱という限られた期間ではありましたが、総入場者数が1万人を超えました。美術館が人々の癒しや寛ぎ、そして楽しみの場であることを、スタッフ全員が痛感しました。

### ミュージズ(美の女神)の住まう館；

#### 音楽・演劇・美術・映像の饗宴

震災により公共のホールや公民館などが軒並み被害を受け、熊本では多くのアーティストが表現する場を失っていました。私たちの美術館は、彼等の表現の場ともなり、美術の領域を超えた創造の拠点ともなっていました。しかも傑出したアーティストたちが次々と集い、館内に美しい音楽が高鳴るのを、多くの市民県民が体験することになりました。本来、美術館は芸術家の表現の場であり、子供たちからお年寄りまでの教育の場でもあり、その文化的活動により、コミュニティが育ち、進展し、活気づき、街なかや市全体が豊かになることを願っていたのです。

大地震の後、美術館を訪れ、傑出した演奏を聞かせた芸術家は、例えば山田和樹(ピアノ)と西田紀子(フルート)の「ヤマカズが贈るミニコンサートin CAMK」、モスクワ出身のショパン国際ピアノコンクール優勝者ユリアンナ・アヴデーエワのピアノコンサート、中米ベネズエラで世界的に注目される音楽教育システムが生みだしたエル・システマ弦楽四重奏団、そして佐渡裕が率いる「スーパーキッズ・オーケストラ」等々、高揚感に満ちたコンサートが、次々と開催されていったのです。また夏には「上通演劇まつり」、「夏のこども映画まつり」、「ジャズフェスティバル」等、県と市の行政の領域を超え、緊密な共催作業による実に多様な事業が開催されてきました。

美術館内では、音楽、美術、演劇、ダンス等、各領域をやすやすと超え、躍動感に満ちた音楽が高鳴り、他分野のアートとの交流が見られたのです。ミュージアムの根源の姿に回帰するように、正に私たちの美術館は、美の女神が住まう館となっていたのです。

### 熊本地震が教えてくれたもの

大地震はどこでも起こりうる、そしてすべての地震はそれまでのどの地震とも異なるもの、これは私たちが深く再認識したことでした。そして今回の地震が私たちに教えてくれたことのいくつかを記してみます。

多くの熊本の人々が語っていた「熊本には地震が少なく、大地震は来ないと言う神話」が崩れたこと。さらに歴史上での熊本での大地震が次々と明らかにされてきました。

熊本の工場や一般家庭で使用されている水はすべて地下水で賄われており、大自然の濾過のプロセスを経た水であります。今回、濁り水が出たり、池に濁水が生じたりしました。これは溶岩によって濾過されたきれいな水が、大自然から永遠に供給されるとは限らないことを知らせていました。

この地震で不幸中の幸いであったのは、気温20数度、湿度約50%、寒くも暑くもない季節であったこと。火を使う時間帯でなく、多くの火災が

発生しませんでした。真夏であれば疫病の大流行も起こり得ました。さらに昼であれば数千人もの観光客が訪れる熊本城に犠牲者が出なかったこと、これは石垣が崩れ、巨大な石が何千と転がる城内を見れば、奇跡としか言いようがありません。

大方の店が閉まり、日々、大勢の人々が水や食料を探して街をさまよう中、驚いたのは、閉まっていた店の前などに台を備え、ミネラルウォーターを並べ、店主が無料で配っている光景に何度か出会った事でした。この大混乱のさ中、市民は冷静でありました。コンビニ、スーパー、個人商店などが再開された時、野菜、魚、肉などの商品の豊かさにはびっくりしました。これは正に熊本の自然の豊かさを示すものでした。さらにこれも特筆すべきではありますが、物価の高騰がなかったこと。魚市場ではセリで値段がせり上がるのを防ぐため、じゃんけん方式がとり入れられ、低廉に供給される工夫がとられたのです。集合的な人の知恵であり、優しさでありました。

### 熊本県民文芸賞に反映されたもの

私はここ何年か、熊本県民文芸賞の評論・ノンフィクション部門の審査に関わってきました。毎年秋に、原稿用紙50枚にびっしり書かれた力作が出品されてきますが、2016年には、まだ時間的に余裕が無く、地震を扱ったエッセーは1点もありませんでした。1年を経過した2017年には、10点のうち4点が地震をテーマとし、各々すぐれたものでした。とりわけ第3席の生田亜々子氏の「変わり者の熊本地震体験記」は出色で、貴重な記録として長く残す価値ある作品と思われました。通常は、災害に直面した多くの人々は「こんな地震が熊本で起こるとは想像もしなかった。想定を超えるものだった」と語るのですが、2児の母でもある生田氏は、大地震がいつか実際に起こるものと想定し、転勤で移住する毎に、住む場所の地形を含めた徹底した情報収集と調査を実行。「まるで災害を待って用意」するかのよう何年も準備してきた希有の記録です。「大災害は、運だけでは生き残れない、と思って用意を進めてきた」と彼女は語っています。

### リスボン地震

この熊本県民文芸賞が生み出した秀逸なエッセーは、1755年11月1日にポルトガルの首都で発生したリスボン地震を、徹底的に科学的に分析したドイツの哲学者カントの冷静な姿勢を連想させました。この地震は、ヨーロッパ全土を震撼させましたが、当時31歳のカントは3本の地震論を書いています。ヴァルター・ベンヤミンは、カントが出版した地震についてのこれらの書物は、地震学の始まりと見なしています。カントは「地震は、いつでも、どこでも起こりうる」と明言し、それまで西欧でゆるぎない堅固なものとしていた大地(ground)の概念を変えて行きます。「確実性」の代表であった大地が、リスボン地震後の時代に揺らぎ始めたのです。

因みにリスボン地震は、1755年の万世節の祝祭の日にポルトガルの首都を襲ったもので、推定マグニチュードは8.5～9.0。死者は、建物倒壊、火災、津波の犠牲者を含めて約6万人でした。広場の少ない都市で、河川敷に集まった多くの人々が津波で犠牲となっています。

またカントは、地震や津波、暴風雨等の「人間の力をはるかに超えた自然現象は、人間に恐怖心を引き起こす。しかし、理性の力と構想力をもって人は、自然現象を解明し、恐怖を乗り越えることができる。そのとき、人は自然に対して『崇高』な感じをもち、その崇高さによって、人格性を高めることができる。」と語っています。希有の自然現象は、人間の歴史、とりわけ文化の流れも揺り動かす力を持っています。

震災後のこの2年間、熊本地方では全域での連携強化と復興ビジョンの共有が計られ、復旧・復興は着実に進んできました。そして熊本市現代美術館は、美術活動を軸に据え、しばしば美術の領域を超えて、被災した市民県民や他の文化施設と緊密に連携し、創造的復興に繋がるべく、多様なアートの活動の場となってきました。地域における公共文化施設の存在理由と価値は何か、そして被災した文化財に対する国の制度の在り方等、改めて再考する機会となりました。



川内倫子 川が私を受け入れてくれた

# CAMK 復旧日記

## 発災から完全オープンまでの70日間の記録

平成28年4月14日、16日の2度の地震を受けて、熊本市現代美術館は本震から24日後の5月11日に一部オープン、70日後の6月25日に完全オープンすることができた。

本章では、その期間を美術館の「復旧」のための時間ととらえ、その70日間の復旧日記や、地震を体験したスタッフ達の声、美術館の被害の概要、西原村の消防団で復旧活動にあたりながら被災状況を撮影した写真家・宮井正樹の写真を紹介する。

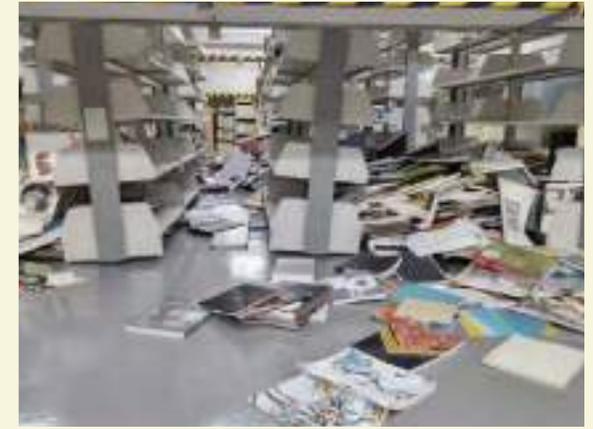


復旧作業中にスタッフが摘んできた四つ葉のクローバー

### 平成28年4月14日 【前震】

午後9時26分、熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の巨大地震が発生。

当時、熊本市現代美術館（以下、美術館）内の事務室に残っていた職員2名は、長く大きな横揺れを体感したあと、複合するホテル日航熊本（以下、ホテル）の正面玄関前に避難し、ホテル宿泊者への対応や、他の職員の安否確認の連絡にあたった。



4階書庫（本の散乱・本棚のずれ）

### 平成28年4月15日 【前震の翌日】

午前1時、熊本市からの指示を受け、美術館内フリーゾーンを開放し、熊本市文化振興課（以下、市文化振興課）職員2名・美術館職員1名により、帰宅困難者の受入に備えた。（午前8時30分まで：避難者なし）

職員は、通常どおり朝から出勤し、美術館の施設・設備や当時開催していた「だまし絵王エッシャーの挑戦状ーダリ、マグリット、福田繁雄から現代のイリュージョニストまで一展」（以下、「だまし絵展」）の被害状況の確認、作品借用元への状況報告などを行い、館内整備のため4月17日まで臨時休館とすることを決定し、関係各所に連絡した。

### 平成28年4月17日 【本震の翌日】

この日は管理職のみが出勤し、再び館内の被害状況の確認と、作品借用元への連絡を行なった。また、今後についての会議を行い、職員は4月22日までの連絡待機（県外出身職員は県外への避難を推奨）、美術館は当面の間（いつまでかは未定）休館にすることと決定し、関係各所への連絡を行った。

### 平成28年4月16日 【本震】

午前1時25分、再び熊本地方を震源とするマグニチュード7.3の巨大地震が発生。

4月17日まで、全職員の連絡待機を決定した。建物全体の空調機も破損し、温湿度管理ができない状態となった。（温湿度を保つため収蔵庫は開けないよう指示。）



「だまし絵展」展示会場（可動壁のずれ）

### 平成28年4月18日 【本震から2日後】

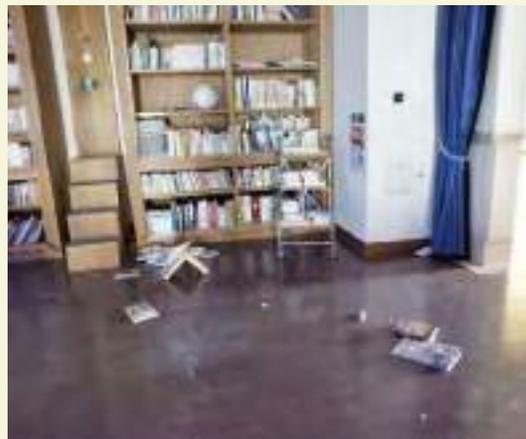
美術館が入っている複合ビル・びぶれす熊日会館（以下、熊日会館）の被害状況説明会が行われ、建物内の空調の復旧は、当分の間、目処がたたないことがわかった。

## 平成28年4月19日【本震から3日後】

(株)日本通運熊本支店(以下、日通)から「作業をするなら動ける」との連絡、「余震が続く、空調復旧の目処がたたない」などの理由から、作品の安全を最優先に考え「だまし絵展」・「淀川テクニック展」の作品を撤収することを決定し、日通に作業を要請。



「だまし絵展」展示会場(展示作品の落下)



ホームギャラリー(本の散乱)



「淀川テクニック展」展示会場(展示作品の転倒や落下)

## 地震、その時職員は…

- ・母が車中泊で限界を迎えて家に戻ったが、小学校に水をもらいに行ったら避難していない人にはあげられないと断られた。
- ・基本は避難所生活、夜は車中泊。地震前に祖母が亡くなり、まだ納骨していなかったので一緒に避難していた。
- ・地震前に父が入院。仕事、家の片付け、父の看病……と忙しかった。短縮勤務は助かった。仕事は言われたことをやっていた。考える力が低下していた感じ。
- ・地震後しばらくすると、自分や家族が疲れてビリピリしてきているのを感じた。家でも職場でも急に不安になる瞬間があった。普段気にしないお客さんの声がしんどく感じることもあった。
- ・知らない人と話すことがあった。「地震怖かったね」の次は「花が綺麗だ」という話題。自然に対する感性が高まった。「綺麗なものがみたい」という共通の声が興味深かった。
- ・美術館と益城の親の実家のギャップがひどかった。1階部分がべしゃんこになっているのに避難所に行っていない老夫婦などもいた。益城での作業は気が滅入った。
- ・自分が地震そのものに巻き込まれなかったのがラッキーだったと思う反面、罪悪感があった。(当時県外在住)
- ・本震のあと、瓦が傾き、壁が崩れ、家は解体。当時は福岡で勤務していたが、職場では腫れ物に触るような感じ。戻ってきたのも地震がきっかけ。両親も精神的に不安だったのかもしれない。(当時県外在住)

※2017年5月11日、18日に行った美術館職員へのヒアリング内容から抜粋

## 平成28年4月20日～4月24日

展示中の作品を降ろし、収蔵庫内へ収納・固定(一部の作品は県外倉庫へと移送)。

## 平成28年4月22日【本震から6日後】

内部会議において、とりあえずの期限として4月28日までの臨時休館を決定。出勤可能な職員は4月23日から出勤するよう決定・連絡を行った。また、当ビルを管理する(株)熊日会館に、美術館内部の損傷状態を確認してもらうよう依頼。



ホームギャラリー(天井亀裂)

## 平成28年4月26日【本震から10日後】

(株)熊日会館・鹿島建物(株)・(株)鹿島建設に加え、市文化振興課や、各設備メーカー(建築・内装・電気・空調・衛生設備・建具)を交えた現地調査を行った。また、内部会議において、5月9日まで休館の期間を延長する旨を決定。この頃から、美術館の開館に関するお問合せが急激に増加した。

## 平成28年4月28日【本震から12日後】

(株)熊日会館、市文化振興課との協議を経て、管理職による会議を行い、財団(公益財団法人熊本市美術文化振興財団。熊本市現代美術館の指定管理者)での工事費負担を決定し、施設工事の発注を行った。この時期、復旧工事の人手不足は深刻で、この機をのがすと数か月後まで工事ができなくなるという状況だった。

## 平成28年4月29日【本震から13日後】

美術館内破損箇所の復旧工事に着工。



館内修繕工事

## 平成28年5月2日【本震から15日後】

館内破損箇所の復旧工事に、おおよそ完了の目処がついたため、5月11日にフリーゾーンのみ開館することを決定。この決定を受け、美術館スタッフは、来館者が心地よく過ごせる空間づくりやイベント企画の準備を開始した。



開館に向けての準備

平成28年5月11日【本震から24日後】

修繕・安全確認が済んだフリーゾーンのみであったが、美術館を開館し、映画上映会の開催や、塗り絵、折り紙ができるコーナー、熊本ゆかりの漫画家のマンガコーナーなどを準備し、初日から214名の来館者を迎えた。

また、今後の余震・地震に対応するための展示方法等について、九州国立博物館・東京文化財研究所・全国美術館会議事務局・(株)タキヤを交え、検討を行った。



再開初日の「子育てひろば」

子ども向け映画上映会

平成28年5月13日【本震から26日後】

収蔵庫に一時避難させていた「だまし絵展」の作品のうちエッシャーの作品について、借用元のハウステンボス美術館より展示再開について快諾いただき、5月18日より、展示内容及び展示会場を変更し、「だまし絵展」(特別展示)の無料開催を決定。

平成28年5月18日【本震から32日後】

「だまし絵展」(特別展示)を再開。初日には195名の来場があり、多くの方々から再開を喜ぶ声をいただいた。



再開後の「だまし絵展」(特別展示)

平成28年5月25日【本震から39日後】

メイン展示室内の可動壁の修理・点検が終了し、安全確認ができたため、夏に予定していた展覧会「帰ってきた!魔法の美術館展」(以下、「魔法の美術館展」)を予定通り開催することに決定。展覧会には、市民に元気になってほしいという願いを込めて、「かがやけ、くまもとの笑顔たち」というサブタイトルをつけた。

平成28年6月25日【本震から70日後】

メイン展示室の「魔法の美術館展」が開幕し、美術館内すべてのスペースが再開した。



「帰ってきた!魔法の美術館展」



再開後の館内の風景

館内の被害状況及び修繕記録

実施内容	実施期間	被害・修繕箇所及び状況
全館被害状況確認 (外観目視)	4月26日(火)	(1) 全館天井、壁の破損等 ・全館扉の破損、脱落、歪みによる不開確認等 ・全館照明破損、脱落、剥落物による汚損、漏電等 ・全館空調関係排気口脱落、ダクト破損等 ・全館スプリンクラー脱落等 ・ホームギャラリー天井(ひび割れ) ・授乳室天井(5F給湯器破損による水漏れのため)
修繕工事(天井) 吊りボルト等の安全・緩み・金具等確認		(1) 安全・破損箇所確認、ボルトの増し締め、金具交換:全般 (2) 落下しかけている天井の取り除き、張り替え、塗装 ① エントランス ② ホームギャラリー ③ ギャラリーⅡ ④ ギャラリーⅢ ⑤ 授乳室
修繕工事(壁) 安全確認、ひび等補修、塗装		(1) 安全・破損箇所等確認:全般 (2) ひび、剥がれ等補修、塗装 ① エントランス、ホームギャラリー、ギャラリーⅢ、井手記念室 ② バックヤード廊下:外れかけている壁の補修(1箇所) ③ バックヤード廊下:クロス剥ぎ取り(3箇所)
修繕工事(空調設備) 天井内部破損確認、破損箇所補修		(1) 安全・破損箇所等確認:全般 (2) 破損箇所補修 ① 会議研修室・機械室天井裏ダクト破損補修 ② 清掃員控え室排気口補修 ③ 授乳室排気口復旧
修繕工事(電気設備) 漏電、破損、落下等確認、補修、清掃	4月29日(金) -5月25日(水)	(1) 安全・破損箇所等確認:全般 (2) 復旧、補修、清掃 ① 落下しかけている照明器具の補修(全館) ② 漏電補修 ・エントランスダウンライト ・会議研修室ライティングレール ③ 照明器具確認・清掃(ギャラリーⅠ、Ⅱ) ④ 安全確保のため取り外し(エントランスペンダントライト) ⑤ アートロフト天井安全確認(落下物復旧他) ⑥ ホームギャラリー間接照明復旧
修繕工事(給排水設備) 破損、落下等確認、補修		(1) スプリンクラー確認:全般 (2) 落下等復旧 ① 授乳室 ② ギャラリーⅢ *GW明け作業
修繕工事(扉復旧) 脱落、歪みによるズレ、不開等復旧		(1) 安全・建て付け確認:全般 (2) 復旧 ① ギャラリーⅠ・Ⅱ正面扉 ② ギャラリーⅠ裏扉 ③ ギャラリーⅠ非常口(1箇所) ④ ギャラリーⅢ非常口(1箇所) ⑤ PS(パイプシャフト)室扉(1箇所) ⑥ アートロフト倉庫(1箇所) ⑦ 会議研修室扉(1箇所) ⑧ 収蔵庫扉(1箇所) *GW明け作業 ⑨ ボランティア室扉(1箇所) *GW明け作業 ⑩ 従業員控え室扉(1箇所) *GW明け作業
その他安全確認点検・メンテナンス (ギャラリー内可動壁の安全点検、補修)		(1) 安全・建て付け確認:全般 (2) 復旧



宮井正樹 <熊本県阿蘇郡西原村> 2016年4月22日



宮井正樹 <熊本県阿蘇郡西原村> 2016年4月22日



宮井正樹 <熊本県阿蘇郡西原村> 2016年4月22日

**宮井正樹(みやい・まさき 1971ー)**

写真家。熊本県出身・阿蘇郡西原村在住。  
熊本を拠点に写真事務所の代表を務め、自身の作品や美術館等での撮影のほか、くまモンの公式フォトグラファーとして国内外で活躍する。主な展覧会に、2008年「ピクニック、あるいは回遊」展(熊本市現代美術館、熊本)、2016年「CAMKコレクションvol.5 知っとるね?くまもとのお宝、大公開てばい!」(同)などがある。

## スタッフ座談会

熊本地震が起きたとき、どう行動したか。また、地震を経て、自身の考えや行動などにどう変化がみられたかという点について、美術館学芸員と総務職員による座談会を行った。



2017年10月26日、熊本市現代美術館にて職員5名により収録。

### 1. 熊本地震が起きたとき

2016年4月14日、16日、熊本市で震度7の地震が2回発生した。ともに閉館中の夜間に起きたが、前震(4月14日21時26分)のときには館内に2人の職員が残っていた。翌日はほとんどの職員が出勤したが、その晩、4月16日1時25分に本震が起きた。

**総務S:**ちょうど美術館から帰ろうとしたときに揺れを感じました。最初は「そう大きくもないな」と思ったんです。そしたら立っていられなくなって、「ちょっとマズいやつが来たな」と思い、地震訓練のマニュアル通りに動きました。地震発生後、しばらく事務所にいました。というのも、美術館内は安全だという教えを守っていたからです。そのとき、館内の被災状況とかは見ませんでした。確かに今まで経験したことのない大きさの地震ではありましたが、そんなに焦りはありませんでした。警備から館外に出るよう連絡があり、向かったところ、集合場所には美術館と同じ建物内にあるホテル日航の人たちも集まってきていました。そのときに「益城が大変だ」ということを聞き、「思った以上に熊本が大変なことになっているのか」と認識しました。

**総務O:**避難が落ち着いたあと、家族や仕事のことなど、心配になったことはありましたか？

**総務S:**このとき携帯電話も館内の電話も繋がらない状況でした。なので、とりあえずは、じっとするしかない。感覚的に「自宅はたぶん大丈夫だろうな」というのはありました。あとは友人から連絡が来たりして、全国でニュースになっていることを知り、「もしかしたら、ヤバイかも？」と思いました。

**総務M:**私は前震のときはバスに乗っていました。家族がどういう状況なのかも判らず、渋滞もして、バスがなかなか進みませんでした。LINEだったら電話も通じていたので、LINEで連絡して家族の状況を聞き、「大丈夫だな」と思って一旦帰りました。16日の本震のときは、余震に備えて自室の2階ではなく1階で寝ていました。すぐに外に出ると近所の人も出てきていました。本震のときは、近所の人の車に乗せてもらって熊本県立農業高校の体育館に避難しました。

**学芸員I:**前震が起きた時はバスに乗っていたことですが、あとどれくらいで家に着く距離

だったんですか？

**総務M:**あと30分くらいの距離でしたが、1時間以上かかりました。おそらくみんな一斉に食料を確保するためにコンビニなどに向かっていったため、渋滞が起きていたんだと思います。

**総務O:**あのときは、東日本大震災を思い出した人は多かったと思います。特に本震のときは南区や県南、海沿いの人たちが、非常に津波に怯えていたと思います。その渋滞は、海沿いから離れて、中心地の方に向かっていった人が多かったんでしょうね。私は、1週間ほど、実家のある天草市から通勤していましたが、いま思うと、震源地の近くで被災した人たちは、「今の状況をどう乗り越えるか、生き残るか」という心境がかなり強くて、先のことまでは考えられない人たちが多かったのではと思います。しかし、別の地域では、次は私たちのところが、という不安を抱えていた地域もあったと思います。それこそ、県南や海沿いの地域は、鹿児島島の川内原子力発電所は大丈夫なのかとか、津波が来るんじゃないかとか。それぞれの地域によって、抱えていた不安やストレスは違っていたように感じました。

**学芸員I:**2回大きな地震が発生したので、3回、4回という不安が生まれやすかったということもあるかもしれませんね。

**総務O:**そうかもしれません。時間を置いても、復興に手をつける時間も地域で差があり、そういったことも影響したのではないかと思います。あと

は、家族がいるのか、一人暮らしなのか、子どもがいるか、仕事をしているかなども含めて、個人個人での心の余裕の差もあったでしょうね。

**学芸員I:**Iさんは当時関東在住でしたが、関東で報道を聞いていて、どうでしたか？

**学芸員I:**前震のときはテレビに通町筋が映っていましたが、街の灯りは消えておらず停電はしていませんでした。大丈夫なのかなと思いました。また映っていたのが、たまたまはしゃいでいる大学生とかだったので、「元気そうだな」くらいに思っていました。しかし本震後の朝のニュースでは、熊本一色の報道しかなかったので、「これは前回よりひどいことになったらしい」と思いました。個人的には親戚が熊本にやや近い鹿児島にいたり、県南の人たちと同様、川内原発の心配をしました。また鹿児島北部の揺れはどれくらいだったか、高齢者だけでもちゃんと逃げられているのかとか、そういった個人的な心配事がありました。

報道は最もひどいところを取り上げる傾向が強いです。関東では熊本市内のことよりも圧倒的に益城のニュースを聞いていた気がします。東海大学の学生が一人見つからず、親御さんが捜索を続けていたという内容は、ずっと報道されていました。

2. 「美術館として開けた」こと  
2回の地震後、避難生活の日々やライフラインの復旧工事が続く中、熊本市現代美術館は「美

術館として開ける」ことになった。開館までの流れがつくれ、職員はそれに沿って、片付けなどの作業に取り掛かった。

**総務S:** 僕は開けることに対して違和感がありました。建物を修理して将来のために開館するということはあり得ると思いましたが、それまでの間、職員は避難所に行く市役所職員のヘルプに行かなければならないと思っていたんです。財団職員というのは、あるときは公務員、あるときは公務員ではないというふうに、いろいろと使い分けをされます。「美術館をどう開けるか」というよりも、今回は熊本市の職員と同様にしなければならないと僕の中では思っていました。

**学芸員i:** 美術館として開けるにあたって、ジレンマのようなものを感じたりしましたか？

**総務M:** 私はそんなにありませんでした。美術館の方針に沿って、そのまま突き進もうと思えました。

**総務O:** どれだけそのときに落ち着いたか、余裕があったかですよね。美術館として判断したことを個人的にどこまで飲み込めたか。あのままだと熊本市は暗い街になっていたと思いますが、美術館が再開して、音楽や映画、展覧会を開催したことで地域に与えた影響は大きいと思います。また、美術館として、市民の心の癒しの場を目指して運営してきましたが、実は職員にとってもストレスケアしながらだったのかなと思います。あのときは「美術館を開けるべき」と思う人

や、心に余裕がなく「仕事だからやる」という人もいておかしくない状況でしたが、おそらくいろんな事業をしながら、徐々に足並みが揃っていった感はありますね。

**学芸員I:** 閉館していたら復帰できない人もいたかもしれないということですか？

**総務O:** 個人個人、抱えているものや考え方が違うのでわかりませんが、あの状況では、職員もいろんな不安や考えを持っていたのではないのでしょうか。

**総務S:** 先程言ったように、僕は、職員は避難所にヘルプに行かなければならないと思ってはいましたが、熊本市内の小中学校が5月9日まで休校と聞いていたので、5月11日に美術館を開館することは、タイミングとしてはいいなと思っていました。小中学校の再開よりももし早かったなら引っかかっていたかもしれません。

**学芸員i:** 美術館の開館は、フリースペースから小展示室、企画展示室というように、段階的に行われました。開館後は、地震に関する展覧会の企画や、他団体への会場提供、美術館外でのアウトリーチ事業などにも取り組みましたが、担当や関わる人、時間の経過などによって地震の捉え方や伝え方も変化していたと思います。振り返ってみて、印象的な事業や出来事はありますか？

**学芸員I:** ギャラリーⅢで開催されていた「〇〇(マルオ)の食卓」が筆頭に挙げられます。私は

地震後に採用されたのですが、職員になる前、事前に情報を入手せずこの展示を見て、その内容とタイミングに感動し、また「なんてフットワークの軽い美術館なのだ!」という印象を抱きました。東日本大震災の時は自粛傾向が強かったこともありますし、電力の節約や借用先からの展示許可などいろいろあったので、多くの美術館では、予定していた展覧会を続けるのか中止にするのが議論の中心でした。したがって、地震が起きてわずか数ヶ月で、震災をテーマに美術館が何かをするという発想はほとんどなかったと思います。しかし熊本はそれがパッとできるんだなど。東日本大震災から6年ほど経っているので、その間に社会的な何かも変わったのかもしれませんが、ホットなテーマとして美術館が取り上げていたことが印象的でした。しかも、「展示する」というところから離れて、現代美術館らしくアートプロジェクトという形式になっていたところも非常に評価できると思います。

**総務M:** 地震後に実施したアウトリーチ事業のうち、弦楽アンサンブルの講師である岩井さんは、コントラバスが地震でバラバラになってしまったのですが、東京の方が無償で修復してくださったそうです。壊れていたのがわからないくらい精密に修復されていたのですが、それを実際に生徒の前で演奏していたのが印象に残っています。

**総務S:** 「美術館として」開館したことは、今思えば良かったと思っています。開館してみて、嬉しそうに美術館に来てくれている人を見て、今ま

で自分が見てきた美術館とは違う光景を見ることができ、見え方が違ってきたのかなと思います。それまでは「お客さん来てるな」というくらいにしか思っていないでしたが、「美術館は役に立っている」と思えたんです。それは日頃から「開かれた美術館」「居たくなる美術館」というのを、みんなが意識してやっていたからかなと思えました。日常の運営が大事だなと思えるようになりました。

### 3. 座談会のあとで

**総務O:** 締まります？

**学芸員i:** 何でなんとなく締まらないんでしょう？

**総務O:** 先が見えないからじゃないですか？

**学芸員i:** 結局？

**総務S:** 最後の言葉は〈美術館として開けて良かった〉じゃない？

**学芸員i:** みんなもう気持ちは落ち着いているんでしょうか？

**総務O:** でも時間が経ちましたよね。

**総務M:** 一年半は大きい。

**総務O:** あのときを思い出すと、めっちゃ冷静になっちゃいます。

## 石川直樹が撮った地震後の熊本

石川直樹は2016年の7月と8月、そして2017年2月に熊本に足を運び、熊本城、熊本藩主細川墓所(泰勝寺跡)、熊本藩主細川墓所(妙解寺跡)、塚原古墳群を取材した。

泰勝寺跡や妙解寺跡では、石川の眼と感覚によってその場所ならではの美が追究された。倒れた石灯籠や墓石は、まるでそう計算された配置であるかの如くで、墓所にある静謐な美そのものは、震災によって全く損なわれていないことを明らかにする。

一方、熊本城は被災してもなお人の集う場所であり続けること、樟は熊本城を豊かな緑で縁取り、場所と人々に活気を与えていることも明示する。人々は熊本城の周辺で、崩れた石垣に当たる太陽光に季節の空気が重なるのを何気なく眺めて日々を暮らしている。そのような今の日常が誠実に映し出される。石川は、「言葉が追いつけない涯での風景を留められるのは、写真しかないと思っている。」と新作《熊本城》に対しメッセージを寄せた。

**石川直樹**(いしかわ・なおき 1977-)

写真家。東京都出身・在住。

2008年、東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2008年、平成20年日本写真協会新人賞、第39回講談社出版文化賞受賞。2011年、土門拳賞受賞。主な個展に2012年「異人 the stranger」(東北芸術工科大学、山形)、2015年「Across Borders:」(王立アルバータ博物館、カナダ)、2016年「石川直樹 この星の光の地図を写す」(水戸芸術館、茨城ほか巡回)。主なグループ展に、2013年「国東半島アートプロジェクト 春期」(豊後高田市旧香々地町役場、大分)、2017年「開館15周年記念展 誉のくまもと」(熊本市現代美術館、熊本)がある。



### 熊本城

加藤清正が7年の歳月をかけ築城した天下の名城。「武者返し」と呼ばれる石垣は、下部はゆるやかな傾斜で、上部に向かうほど急な角度になる独特の造りで、城に侵入しようとした敵の武者を返してしまうことに由来する。平成31年の天守閣再建、20年後の復旧完了を目指す。







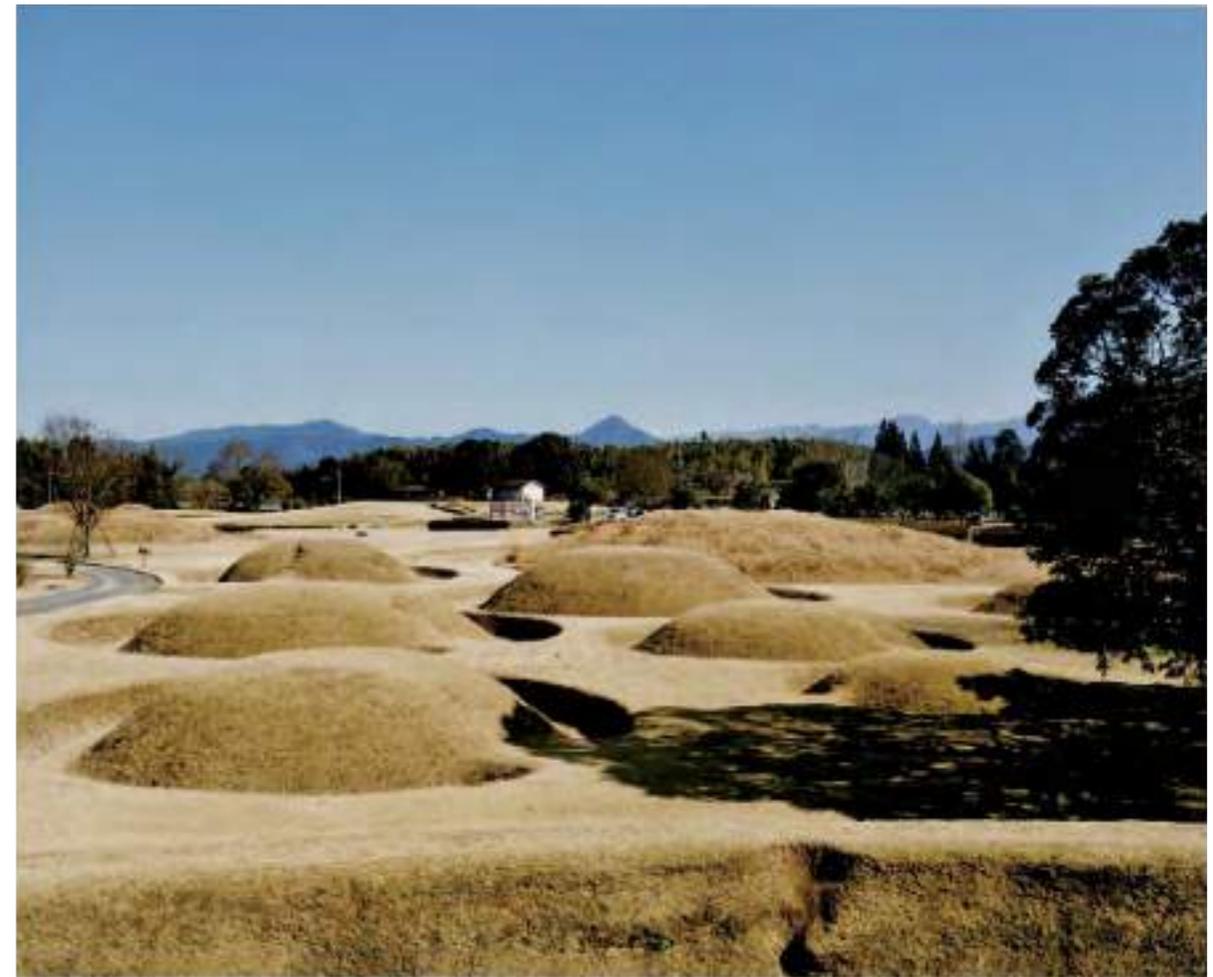
みょうげ じ あと  
妙解寺跡

熊本市中央区にある花岡山の麓にある、細川家三代、初代肥後藩主忠利の菩提寺跡。昭和に入り、熊本市が細川家から譲り受け北岡自然公園として整備、一般に公開する。県の重要文化財に指定される細川家の霊廟のほか、それぞれに殉死した人々の墓があり、歴史を感じさせる。 ※休園中(平成30年3月時点)



たいしょう じ 跡  
泰勝寺跡

熊本市中央区の立田山麓の立田自然公園にある、肥後藩主・細川家の菩提寺跡。細川家初代藤孝夫妻と、二代目忠興とガラシャ夫人の墓「四つ御廟」や、武人でありながら茶道にかけては国内随一といわれた細川忠興の原図に基づいて復元された茶室「仰松軒」などがある。



### 塚原古墳群

熊本市南区にある古墳群で、前方後円墳や方形周溝墓、円墳などがあり総数は約500と推定され、77基が復元されている。昭和47年、九州縦貫自動車道開通に伴う発掘調査により発見され、県民による保存運動の結果、遺跡の下をトンネルで通る、という全国初の方法により、現在のかたちとなって残された。



## 大西一史 熊本市長インタビュー

熊本地震発災後、市民の最前線に立ち、現在も復旧・復興活動に邁進しておられる大西一史熊本市長。フォロワー数9万4千人のTwitter (@K\_Onishi) から日々発信される情報や、「目覚めの一曲」に励まされる市民も多い。市長の考える「文化による復興」とは何か、美術館スタッフがインタビューを行った。



平成29年12月5日(火)午後、日々復旧活動の続けられる熊本城を望む市長応接室で職員4名により実施した。

### 熊本市が目指す復興とは？

—まずは、熊本市が目指す「復興」のイメージをお聴かせ下さい。

**大西市長** 復興には、まず震災前の状態を取り戻していくことが大事だと思われませんが、なかなか前と同じには戻らないですよ。大きな自然の力が働いて、私たちは傷ついたり、自然の側から見ると、この自然の上に、人間が「熊本はこうなんだ」と築き上げてきていたので、人工の力で元の状態に作り直すということではなく、リバース(再び生まれ変わる)ということが大事なのかなと思っています。自然の力の怖さ・大きさのうえに自分たちの生活が成り立っているということに気づかされたのが、この熊本地震であつたし、それには抗えない。抗えないけれども、それでも生きていく。そのためには、1人じゃなにもできないよね、というのに気付かされた。1人1人が繋がって、立ち向かうというよりはみんなで力を合わせて、更に再起・再生させていくことが復興なんだろう、それは物理的なことだけでなく、精神的な復興、人々の心を取り戻していく、あるいは新たに気持ちを切り替えられるということが大事なんだなというふうに思うし、それが

熊本の復興だと思っています。

### 市長が「文化(アート)」に励まされた(癒された)瞬間は？

—熊本地震後、復旧・復興活動に全力を注がれる大西市長の姿がtwitterを通して拡散され、私たちも「市長も頑張っている」ことにとっても励まされました。

想像を絶する激務の中で、市長ご自身が「文化(アート)」を意識した瞬間、あるいは「文化(アート)に励まされた(癒された)」と感じた瞬間があればお聴かせください。

**大西市長** 前震直後に見た熊本城の土煙は照明があたっていて赤く染まり、燃え上がるように見えました。あの映像とか色とか雰囲気というのは忘れられない。これは大変なことが起こったと思いました。そのあと本震が起きたとき、今度は熊本城の姿が見えない、暗い、闇だった。そのときから、震災対応に忙殺されて色も音も臭いも感じなくなっていました。

「アート」というのは、そういうものを感じることだと思ふし、作者が込めた表現とか感じたこと

とか、その人が表現したものを受け取る力が必要だと思うけれども、被災した直後はそういったものを受け取る余裕もなく、何も感じられない状態に陥っていた。ただ、少しずつ時間が経つてくると、だんだんその状態が覚めていくように色とか音とか臭いとかが戻ってくる瞬間があつて、私の場合はやっぱり最初、音でした。「アート」というより、電車の音を聞いたときに「あ、電車が動いてるな」、少しずつ戻ってきてるなという感じがしました。「アート」ではなく「サウンド」なんですけれど。

**美術館** それはいつ頃ですか？

**大西市長** 被災して数日経ってからのことでした。

そのあと、国に要望しに行くための東京行き飛行機の中で、イヤホンを付けた瞬間はじめて音楽が入ってきたんです。ウルフルズの“ええねん”がかかった時には、涙が止まらなかった。実はそれまでずっと、被災後の対応がこれなのかと自分を責めていました。自分の中で我慢していたものが込み上げてきた。そのとき、はじめてアーティストが作った曲に触れて、心が取り戻せた、何かを感じとった気がしました。

もうひとつ、震災直後に印象的だったのは、秘書課にたくさん掛けられていた絵画が地震で落ちたりずれたりして、その後、すべて外され床に置かれたのを見た時のことです。それまで何気なく見ていた絵画や作品が視界から消えたとき、普段は意識していない、そういったアートに日常的に励まされていた、感じさせられていたんだと気が

つきました。それらが地震によってなくなっているという状態がすごく寂しかった。その後、現代美術館に行って「3.11→4.14-16 アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本」などの展示会を観て、地震がなければ、そこまで意識しなかったアートがとても大事なことなんだと感じるようになりました。地震という辛い経験をしたから、なにかをアートから吸収しようとしていた。自分の中で絵や作品を見る感覚が変わったんです。美術館に行ってすごく癒されるようになった。

だから「三沢厚彦 ANIMALS in 熊本」展を観て、すげえなって思った。以前感じられなかったものが感じられるようになった。視覚的にも敏感になったのかもしれないし、音にも匂いにも敏感になったのかもしれない。そうやって感覚が変わってきて、作家の人たちが込めていたものを感じ取れるようになったのは、地震というネガティブなものから、反作用として出てきたポジティブなことだった。だから、美術館にすごく行きたくなくなったし、いまでも行きたいですし、音楽も7月くらいから毎日聴くようになりました。

作者が込めたメッセージを受け取って、励まされたと思うんです。それは、別に地震を受けた被災者に向けたものじゃないけれども、それからなにかを自分の主観で感じ取って励まされた。これがアートのすばらしさなんだと、最近、思い始めました。そういう意味では、文化とかアートとか芸術というのは、人間の生活の、寝たり、食べたりといったことに対して、本当に必要なものなのだろうかと思ふし、もしかかもしれないけれども、実はすごく大きなもので、実は食べたりすることよりも癒されたりする

ことの方が人間は必要としているんじゃないかと、アートの尊さみたいなものを、この地震から感じ取りました。

### 現代美術館が熊本市民のため、地震からの復興のためにできることは？

—熊本地震の発災から10日ほど経過した頃から、現代美術館は、市民からの開館に関するたくさんのお問合せや励ましのお言葉をいただきました。

開館後も多くの来館者がおいでになり、「人間らしく生きたいと思ったときに、文化(アート)の力が必要とされるのではないか」、「美術館をはじめとした文化施設は、災害時の市民のこころの避難所として必要なのではないか」と考えるようにもなりました。

私たちも、この1年半、市民の熊本地震からの「文化による復興」を手探りで続けてきましたが、現代美術館にどんなことを期待されますか？

復興に向けて「文化(アート)」に期待する役割について、市長の考えをお聞かせください。

**大西市長** 東日本大震災のときに、ラジオから流れてきた曲に癒されたという話を聞いたことがあったんですが、自分が被災した立場になったときには、そのことも忘れていました。くまもとシティFMがラジオで学校の校歌をずっとかけ続けたというのは、すごいなと感じました。そういったアーティストの人たちが込めた音楽や美術の力に触れることによって日常が戻ってくる。そして、新しい日常になっていく。だから、震災後に

聞く音楽も、違う感覚で聞いているし、絵を見ることもとても楽しいことになって、癒されている。更に、自分でもなにかやってみようかとも思えるようになった。原点を考えさせられるようにもなった。私たち行政は、アートからかけ離れているような気もするけれど、アートって実は「人の力」なんですよ。だから、人の力とかメッセージを発信する場と言うのは、これからもっともっと必要になっていくだろうと、特にこの地震以降、その価値を再発見できました。だから、現代美術館には、いただいた声を励みにして更に頑張してほしいし、市民の皆さんに元気を与え、復興のためにも活力になってほしい。役に立たないものってないんですよ。

### 地震からの復興のために熊本市と一緒に、私たちが(外郭団体/財団)にできることは？

—私たちは熊本市の外郭団体で、現代美術館の指定管理者を受託しています。美術館では震災前から日常的にコンサートなどをしていたので、地震後、コンサートやパフォーマンスなどの復興応援事業の受け入れが増えたんです。そのときにアートが直接的に人の心に届いていることを感じました。音楽を聴きに來られた人が涙を流したりして、気持ちが浄化されていることも感じられたので、そのような役割を持つ場を運営する財団として、熊本市にももっと活用してもらえるといいなと思っています。

**大西市長** 美術館だとか、芸術だとか、なかなか経済波及効果や経済合理性だけで評価できないものは、ある程度パブリックの力が必要だと

思っているんです。だから、現代美術館を運営しているいろんな事業をやっている財団が安定していることは大事だと思う。また、行政と指定管理者、文化財的価値と観光…等々、二項対立的になりがちな面はありますが、実はこの二つはぶつかるものじゃないと思うんです。最近は、なんでも対立概念で置き換える世の中になっているけれど、正直、そうした風潮には嫌悪感を感じます。現代美術って、なかなか難しいものだったりしますよね。だけど、「ANIMALS展」をみたとき、「こんなに力をもらえるの？」って感じた。

自由っていうのは、なんでもありってわけではないし、財政的制約もいろいろあるんだけれども、その限られた範囲の中で、自由にできるかどうかっていうのはとても大事なことだと思っているし、自由にやってほしいと思っています。

**美術館** 熊本市と財団の目指す方向は一緒だと思うので、もっと文化や芸術でなにができるかということを話したいと思っています。市民がどうしたら幸せになれるのかということ、市長がやりたいと思われていることの一部を私たちも一緒に担っていきたいと思っています。

**大西市長** それぞれの役割があると思うんです。キュレーターの皆さんの役割っていうのは、我々にはできないし、例えば利害調整をしたり予算を付けたりっていうことは行政がやることだし。でもそういった中でもどこか接点はあると思うので、その中で同じ方向を向いて進めていきたいですね。緊張感は必要だけど対話するっていうことが大事。そういう意味では、復興と

アートというのは、目指すべき方向を同じにしていく作用があるのかなと思っている。この辛い災いを福となすために、みんなで一緒になって考える場がいるし、否定しない、いろんな多様性を認めながらやるっていうのは、アートの神髄なのかなという気がしています。

**美術館** 災害もそうですが、時代が変るとその時々で市民が必要とされるものも変わっていくので、財団としてもそういう部分をちゃんと見据えながらやっていかなければならないと思っています。今後もこれからの熊本市について対話を続けさせてください。本日はありがとうございました。

# 文化による復興

## 地震の後、文化に何ができるのか

本震から70日後の、美術館の完全オープンまでが「復旧」であるとするならば、そこから続くのは「復興」の時間であるかもしれない。震災後、「心の避難所」「地域文化の受け皿」として、地域や市民のニーズに応じて、様々な団体と協働しながら美術館活動を行ってきたが、この頃から、「文化による復興」を合言葉に、熊本地震の経験を美術館のアイデンティティの一つにしなが、ら、展覧会などの自主事業を実施しはじめた。

この章では、ギャラリーⅠ、Ⅱ、及びⅢで実施された、熊本地震と関わりを持つ企画展を通して、「地震の後、文化に何ができるのか」ということを考えながら、走り続けた軌跡を紹介したい。



再開館直後から多くの親子連れでにぎわった「街なか子育てひろば」

熊本地震発生当時、当館のメインギャラリー（ギャラリーⅠ・Ⅱ）では「だまし絵王エッセーの挑戦状」展という自主企画展が開催中であり、私はその担当者だった。ここでは展覧会担当者の目線から、熊本地震発生後の対応とそれを経ての所感を手短かにまとめた。

4月14日の前震の時、私は熊本市内の自宅におり、地震発生後すぐに近くの小学校に避難した。広い校庭に到着して自分と家族の身の安全がひとまず確保されたとき、次に思い出されたのは出展中の作品のことだった。しかしその時点では展示会場の状態を確認する術はなく、気にはかかりながらも余震の続く中で町内の救助活動や避難者確認など目の前の作業に協力するのみでその晩は終えた。

翌15日に美術館職員は皆出勤し、学芸員を中心に展示会場の状態確認を行なった。大きな揺れにより可動壁のズレが発生し、作品の一部に負荷がかかってしまった部分が見られたが、半壊・全壊というような大規模な作品被害は発生していなかった。手分けして会場・作品の状態の記録写真を撮り、エッセーの平面作品など職員だけでも動かすことができる一部の小型作品は余震に備えて一旦床に降ろすことにした。この時点では、会場の復旧のために一度作品は全て撤収する必要があるが、余震も落ち着いてしばらくすれば再展示を行って展覧会も再開できるのではないかと、美術館としては見通していた。

作品を借用していた各館など、展覧会関係者にはこの日のうちに作品のコンディションや当面の美術館の臨時閉館について報告を行なっ

た。なお多くの借用先からは、見舞いの言葉とともに作品の安否確認の連絡がすでに届いていた。またこの日、日頃から作品の展示・輸送をお願いしている日本通運熊本支店の担当者から、多少であれば作業員を動かせるが、ただちに移動させる必要のある作品はあるか、との連絡があった。そこで仮設壁に展示をしていた作品や一部の立体作品などについて、大事を取って撤収作業を行なった。時間も人手も非常に限られている状態ではあったが、間もなく発生した本震のことを考えると、この作業は被害縮小に効果があったのではと思う。

そしてその夜（16日未明）、本震が発生。これを受けて、県外出身者で実家など避難できる行き先のある職員はそこに避難するように美術館から指示が出された。そのため自分も福岡の実家へと一時避難することとなった。本震後の展示会場の状況は、夜が明けてから別の職員が確認し、私はそれを電話で伝えられた。借用作品の中には落下して額が破損したものもあったが、作品本体はおおむね無事な状態だった。しかし当館の収蔵作品のうちの一点は展示用金属ワイヤーが断裂して落下し、装飾額の部分が大きく破損してしまい、修復が必要な状態となってしまった。

展覧会関係者には再度、本震後の作品及び美術館の状況について報告を行なった。この時点で、地震の収束の見通しはつかず、展覧会の再開を検討できる状態ではなくなった。その後も繰り返す大きな余震のなかで、私自身も、いつまでもこの揺れは収まらないのではないかという気分になっていた。

その後、日通作業員の方々も皆被災している中であつたが何とか人員を集めてもらい、作品は4月24日までに全て会場から撤収し、収蔵庫に収めた。地震の影響で美術館の入っているビルの空調機器にも不調が発生し、空調のみで温湿度の制御ができなくなったことから、通風により一部外気を通すなどして温湿度の調整を試みることとなった。それらの状況や温湿度の具体的な数字などについても、熊本に残っている職員から関係者に対して適宜報告を行なった。そしてそのお返事に、多くの方から見舞いや励ましの言葉をいただいた。

私自身は4月21日に熊本に戻り、翌22日には出勤を再開した。早く現場に戻り、できる限りの職務を果たさねばという思いを抱く一方で、まだ大きな余震が続いていたことから、熊本入りするときにはかなりの緊張感があったことを覚えている。保存のきく食料やヘルメットなど、多くの物資を持参しての帰宅だった。

余震の続く中で、再開館や展覧会をどうするかといった方針について館内で協議が行われ、美術館自体は安全確認と必要な修復措置のために地震からおおよそ1ヵ月のあいだ臨時閉館とし、メンテナンスが完了したフリースペースのみ5月11日より部分的に再オープンすることとなった。「だまし絵」展のもともとの会場だったメインギャラリーは、可動壁のレールなど設備の安全確認にまだ時間を要し、また余震も継続していたこともあり、本展を本来の形で再開することは断念せざるをえなかった(本展ではエッシャー作品を軸としつつ、それと関連づける形で古今の作家約30名の作品を同時に展示していた)。

なおエッシャー作品については所蔵者のハウステンボス美術館から再展示の了承をいただき、先んじて整備が終了したギャラリーⅢと井手宣通記念ギャラリーという小展示室二室を使い、会場を替えて展示できることとなった。本展の出品作の中からエッシャー作品約40点を抜粋し、エッシャーの個展として構成し直した形で、5月18日から6月12日まで観覧無料で公開した。この小規模展示は1ヵ月に満たない期間ながら1万人を超える来場者があり、「展覧会を訪れたことで、日常を取り戻せた気がする」といった声も聞かれた。この展示が市民の励ましとなったことはたいへんよかったし、またそのような市民の声は、自分も含めた美術館職員にとっても大きな励みとなった。

一方で、本来の形で展覧会を見てもらうことができなくなったことは、やむを得ない状況とはいえ企画者としては非常に残念だったのも事実である。関係者、特に今回の企画に合わせて新作を準備してくれた作家に対して展覧会の再開断念を伝える際には、悔しさと申し訳なさを深く感じざるを得なかった。震災発生直後はただただ目の前の事態に対処するのみという状態で、落胆しているような時間もなかったが、小展示室でのエッシャー作品の展示が終了し、借用作品も全て返却し終えて作業量が少し落ち着いてくるころには、展覧会開催までに自分や関係者の積み重ねた仕事が、地震によって吹き飛ばされてしまったという事実が改めて実感され、しばし無気力な状態になってしまうこともあった。

時間とともに精神的に立ち直りはしたが、今も展覧会のたびに「また地震が来て中断される

のでは」という恐怖はたびたび頭をよぎる。自分たちにできるのは、地震が起きても来場者や作品に被害が出ないように、作品や関係器具の落下防止などにできる限り細かく気を払い可能な備えを尽くした上で、ただ無事を祈ることのみである。

(佐々木玄太郎／熊本市現代美術館学芸員)



震災発生前の「だまし絵王エッシャーの挑戦状」展会場



再開館後の小展示室でのエッシャー作品特別展示



器とあなたの食卓の写真を交換する展覧会  
丸尾三兄弟 <sup>マルオ</sup>〇〇の食卓

会期:2016年7月16日(土)~9月11日(日) 50日間  
会場:ギャラリーIII  
入場者:11,845人

「丸尾三兄弟 <sup>マルオ</sup>〇〇の食卓」は、熊本地震を背景に生まれたアートプロジェクト型の展覧会で、地震発災の3か月後にいち早くスタートした。「天草陶磁器」を代表する窯元・丸尾焼の六代目にあたる丸尾三兄弟こと、金澤佑哉、宏紀、尚宜は、地震によって、家庭の多くの器が割れ、避難所では人々が紙皿を使って食事をしている姿を目にした。彼らは、陶芸家としての自分たちに出来る支援のかたちとして、予定していたギャラリーIIIの企画として「自作の器を来場者に1人1枚プレゼントするかわりに、それぞれの食卓を写真に撮り、エピソードとともに送ってもらい展示する」というプロジェクトを立案した。

会期中、丸尾三兄弟が1点1点制作した、約500枚の器を配布し、300枚以上の写真が美術館に返送され、会場を埋め尽くした。非常に好評で、並べるそばから器がもらわれて行き、会期中5回以上補充を行った。「とても励まされた」、「日常の食卓の大切さや有難さを改めて感じた」、「盛り付けやメニューを考えるのが楽しく、久しぶりに心が弾んだ」というような声や感想が多く寄せられた。



<sup>マルオ</sup>「〇〇の食卓」展 応募写真から

「<sup>マルオ</sup>〇〇の食卓」に応募いただいた食卓の写真とエピソードの一部をご紹介します。すべての応募作品の写真とエピソードは、「丸尾三兄弟 <sup>マルオ</sup>〇〇の食卓」展ブログ (<http://maruonosyokutaku.hatenablog.com/>)でご覧いただけます。たくさんのご参加、本当に有難うございました。



7月17日  
熊本市在住、子供3人の5人家族です。震災後から母も加わり6人で暮らしています。中学生の息子の気に入ったお茶碗を1つ頂きました。丸尾焼のお茶碗を眺めて、触って、あったかい気持ちを感じています。人生色々ありますが、食べて、力をつけて、前に進んでいきたいと思っています。

7月20日  
多くの方と同じように、ほとんどの食器を失くしました。自宅ではなく一時避難先で生活しています。質素な食卓で恥ずかしいけれど、器にこもった気持ちがとてもありがたく、なんてことないおかずも喜んでくれていると思います。





7月22日  
実家から離れて独り暮らしをしています。もともとは料理が好きではなく、使ってみようという器のためにご飯をつくるようになりました。食事に目を向けることは、自分が暮らしている土地に目を向けることだと知りました。熊本が好きです。熊本市北区在住。

7月31日  
益城町在住。マルオさんの器を手にしたとき、ほっとするような温かさを感じ、震災後初めて、ゆっくりお茶をたててみようという気持ちになりました。静かにお茶を頂くこと、ただそれだけで日常を取り戻せたように感じます。



8月17日  
夏休みに遊びに来た孫達が、朝食に初めて卵焼きを作りました。おにぎりや、味噌汁と一緒に美味しく食べています。初めてにしては、なかなかの出来映えです。孫達は地震で自宅が全壊しましたが、元気に楽しい夏休みを過ごせたようです。天草市在住。



8月22日  
小さいころ母が買ってくれたクマの平皿も、旅先で買った空色の小鉢も、旦那さんが誕生日に贈ってくれた花柄の丸皿も、割れてしまった。あの揺れ以来こわくて、食器を棚に戻せなくなってしまった。また割れるかもしれないと思って、食器たちは数ヶ月間床の上に置いたままだった。でももう元に戻そうと思う。天草から新しい食器が来てくれたことがきっかけで、そう考えた。いま食器たちは棚に戻っている。こころの復興、一歩前進。スーパーマルオブラザーズ、ありがとう。いただいたご飯茶碗で白ご飯をもぐもぐ。

9月5日  
今回の企画について、ある晩主人と話しておりました。私たちは県外から転勤で来ており、来た時から熊本のみなさんの優しさや面倒見が良く、あたたかく接してくれる気質を素敵だなあ、と常に感じておりました。震災の後、更にそう思うようになったのは言うまでもありません。食器棚が倒れて気に入りの器を幾つも失いましたが、今回新たに素敵な器に出会えたことを大変嬉しく思っています。ありがとうございます。



9月10日  
熊本市東区在住。人の優しさに救われる日々。地震で得たものも多かったなど、最近思えるようになりました。すてきな企画をありがとう。大切に使います。

## 「丸尾三兄弟 <sup>マルオ</sup>〇〇の食卓」展グッドデザイン賞 受賞

「丸尾三兄弟 〇〇の食卓」展は、公益財団法人日本デザイン振興会が選定するグッドデザイン賞を受賞したほか、関連する多数の展覧会に出品し、多くの方にその内容をご覧いただくことができました。プロジェクトに参加・ご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。



### グッドデザイン賞審査委員による評価:

熊本地震のボランティア活動としても評価できるが、アートプロジェクトとしても非常に興味深い。食は生活の根源であり、人が何を食べているのか知ること、その人となりを知ることにつながる。この展示では、震災後の家庭の食卓がどのようなものであったのか、記録すると同時に、そこには震災後とはいえ「温かな家庭」があり、それが精神的苦痛を支えていたという人間らしい営みが垣間見られる。極めて意義のあるプロジェクトとして評価した。

## 「私の選んだ一品2017 グッドデザイン賞審査委員セレクション」展

期日:2017年10月4日(水)~10月27日(金)

会場:東京ミッドタウン・ミッドタウンタワー5階デザインハブ

※伊藤香織氏(東京理科大学教授)による推薦。



## 「2017年度グッドデザイン賞受賞展」

期日:2017年11月1日(水)~5日(日)

会場:東京ミッドタウン・ミッドタウンタワー4階カンファレンスほか

## 「GOOD DESIGN AWARD 2017 食べるデザイン」

期日:2017年11月1日(水)-11月13日(月)

会場:GOOD DESIGN Marunouhi



## 「2017年度グッドデザイン賞海外巡回 ChiangMai Design Week 2017」

期日:2017年12月6日(水)-10日(日)

会場:チェンマイ市内各所

## 「2017年度グッドデザイン賞海外巡回 Bangkok Design Week 2018」

期日:2018年1月27日(土)~2月4日(日)

会場:TCDCバンコク



## お客様の声

震災の後、被災された方や地域の現状を考えたときに、早期再開を悩んだり、職員も疲弊し、なかなか前を向けずにいました。

そんな中、当館の再開を望む声を少しずついただくようになり、いち早く美術館を開けるといふ決断をする大きなきっかけとなりました。正直、本当に開けていいのかという迷いがあったのも事実ですが、5月11日の再開後、ご来館いただいた皆様より心温まるたくさんの応援メッセージをいただき、その迷いも徐々に薄れていきました。

改めて、多くの皆様に支えられているという、その存在の大きさと温かさを職員全員が実感しました。ここでは、そんな、皆様からいただいたメッセージの一部を掲載させていただきます。

■震災後にもかかわらず、展覧会を開催して下さってありがとうございます!

■一緒に前に進んでいきましょう!! 現代美術館から熊本市、そして熊本県へ元気を届けて頂ける事にただただ感謝です!!! 負けん県頑張る県くまもと!

■地震のとき、一番に気になったのはこの美術館のことでした。記事にちょっとショックをうける事もありましたが、とても安心したのを覚えています。これからも応援してます!!

■地震があったにもかかわらず、エッシャー展をして頂き、大変うれしく思います。あれ以来、初めて市内へ来ました。

■熊本市現代美術館のスタッフの皆さんの努力により、このような素晴らしい作品を、しかも

無料で鑑賞させていただいたこと、心より感謝申し上げますとともに、一日も早い復興を微力ながら応援させていただきたいと思います。本当にありがとうございます。

■熊本地震のためどうなるのかと思っていましたが、見ることができよかったです。とても興味のある作品ばかりでした。

■震災で大きな被害が無かったようで、安心いたしました。これからも中心部に来た時は、立ち寄らせていただきます。

■震災からの復興おつかれさまでした。ロビーだけでも開館を急がれてたことや、地に足をつけたご活動が印象的でした。

■お休みを経ての再開館。よかった・・・現美大好きです。深い傷を負った熊本ですけど、時間をかけて少しずつ再生していきましょうね。スタッフの皆さんも被災されてあるなか、ご苦労様です。心をつよく持って、一日一日しっかりやっていきましょう。

■地震の片付けに終始する毎日の息抜きになった。(地震と関係のない絵を見て少し頭が楽になった、リフレッシュできた)

■震災後、初めて外(街)に出て、鑑賞できる所に来た。震災後、初の展覧会(美術館)。

■震災で大変な中、みなさんが復興に向けて様々な努力をされていることに心を打たれました。みなさんの努力の結晶のようで元気をもらいました。



## 被災した収蔵作品の状態確認を行う コンディションチェック作業そのものを公開 熊本市現代美術館所蔵作品より 被災作品 公開コンディションチェック展

会期：2016年11月9日(水)～11月27日(日) 18日間  
会場：ギャラリーⅢ、井手宣通記念ギャラリー  
来場者：1,939人

収蔵作品への地震による被害等を確認することを目的とした展覧会である。公開でコンディションチェックを行うことにより美術作品被災について市民と共有する機会となった。3回の展示替えを行い、58点を出品し、チェックを行った。

公開で行った理由として、収蔵庫という密室で作品のコンディションチェックを行うには、人と作品の安全確保がまだまだ見通せない時期でもあり、当館の収蔵品は大型作品も多い為、十分なスペースの確保の必要性もあった。

本展は、温湿度が管理された人と作品ともに安全な空間としての展示室にて、まずは大型作品や今後収蔵作品展での展示を予定している作品群の他、写真や版画、日本画、布や綿による立体作品など素材の異なる作品等を選出し、作品への地震の影響を確認するコンディションチェックを行うことを目的とした。

わたしたちの時代の思考を未来まで伝え残す熊本の大切な文化財として、被災した収蔵作品が1点ずつどのような状態なのかを確認・公開することは、震災の記憶を残すためにも、収蔵館が行う大事な業務のひとつと館として考えたことに基づいている。



## やって良かった！ミュージアムIPM

2010年の作品燻蒸事故をきっかけに、当館は「ミュージアムIPM(Integrated Pest Management)」という作品および作品環境の管理方法を導入し、7年間活動を展開してきた(現在3名が文化財IPMコーディネータ資格保持者)。本稿では、その活動が、地震時において作品と作業にあたる人間の安全確保に大変有効に働いたことを紹介したい。

そもそもミュージアムIPMとは、地球環境や人体への悪影響を考慮して、薬剤に頼らずに行う日常的管理の徹底と継続による虫菌害防止対策のことを指す。「博物館・美術館・資料館・図書館・文書館等の建物において考えられる有効で適切な技術を合理的に組み合わせ使用し、展示室、収蔵庫、書庫など資料のある場所では、文化財害虫がいないことと、カビによる目に見える被害がないことを目指して、建物内の有害生物を制御し、その水準を維持する」という考えであり\*1、作品・収蔵庫・展示室・出入口等、美術館全体を清浄に保ち、日々変化し続ける環境の現状を把握するためのトラップ設置や日常的な危険箇所観察など、館職員・関係者全体で意識的に予防に励んでいる。九州においては、九州国立博物館が先導的な存在であり、当館職員の多くが九州国立博物館でのミュージアムIPM研修会に参加し、知識を深め実践してきた。

### IPMメンテナンスなど

被災の直前に、収蔵庫本室のみではあったが、長年計画していた、専門業者株式会社タクトによるIPMメンテナンスを実施出来ていたこと

が、結果的に収蔵庫内の被害を減らし、また庫内復旧への人的負担が減ったことに繋がった。

タクトによるIPMメンテナンスとして、床と壁と棚のIPMクリーニングと、収集したダストの調査分析等を依頼していた。

この実施にあたり、所蔵館学芸員の作業としては、庫内の床置き作品(主に絵画)のたとう箱(作品収納用の箱)の拭き取り作業を行い、庫内に戻す際には、サイズ別での整理された積み直しと、空調の通りを良くする(清潔かつ作品に適切な温湿度に管理された空気が収蔵庫全体に行き渡ることを意識した)作品配置の指示を行ったが、この配置が、震災後の収蔵庫内での、特に復旧作業時の人間の安全通路も同時に確保することに通じたのは驚きであった。空気の通り道として作っていた通路が、復旧作業時の有効で安全な通路となったのである。

また、このIPMメンテナンスの関連調査として依頼していた庫内の「付着カビ拭き取り検査」については、カビは検出されずという結果だったため、被災時の空調故障後にも、庫内のカビ大発生の可能性は低いと判断出来、不安要素がひとつ減る明るさがあった。空調故障時に庫内にカビが大発生したという被害を、深刻な一例として耳にしたことがあったからである。

他の収蔵庫に関しても、月々に実施していたIPMクリーニング(掃除機がけ・たとう箱拭き取りなど)の積み重ねが、被災時に作品環境が急変(悪化)しなかった要因と考えているが、被災により本格的なIPMクリーニングの実施計画が先送りになっている。今後の重要な宿題である。

## アナログ温湿度計による日常的な管理

4月16日の震災直後から当館を含めた複合ビル全体の空調が故障したが、細やかに建物を管理する業者と連絡を取り、気候の良い時期だったため、庫内に外気を取り入れながら9日間ほどで復旧した。その間、アナログ温湿度計による計測を続けたことで、収蔵庫・展示室の温湿度の変化を実測で追うことが出来た(建物管理業者によるデジタルでの自動計測は、被災のため記録が残らなかった場所もあった)。安全確保出来ないため庫内の全ての場所に入れた訳ではなく、温湿度計記録用紙の交換が滞った場所はもちろんあったが、記録は電池式で自動で続くため、ある程度の計測結果の読み取りは可能だった。

もともと、ミュージアムIPMにおいて危険回避・危機管理の方法として、アナログ温湿度計の要所への配置は強く推奨されており、当館としても館職員がローテーションで記録用紙交換を担当してきた。アナログ温湿度計に残された結果は改ざんが難しいため、他館との交渉の際、信頼性が高く利用価値が高い。

空調について被害の最も大きかったのは収蔵庫前室であり、被災直後からの3日と半日の間、温度30-33℃、湿度78%で安定・継続したという現実を明確に把握し、仮置き作品におけるカビ発生の可能性について予測することが出来たため、作品のコンディションチェックは優先的に行われた。

## 展示会の継続・中止、および借用館への作品返却と被災報告

前年度末に終了していた「川内倫子展 川が私を受け入れてくれた」の作品返却は被災により5月中旬に行った。同じく、G3/井手宣通記念ギャラリーで開催中であった「淀川テクニック展」は4月15日以降中止となり、作品返却は5月中旬に行った。企画展「だまし絵王エッシャーの挑戦状」展は4月15日以降中止となったが、5月18日より、ハウステンボス美術館所蔵作品のみでの縮小展示で再開(6月15日まで)。5月末-6月初頭に他の出品作品の返却を行った。

被災直後から返却まで、各所蔵館や出品作家と、被災時の展示室や収蔵庫での温湿度管理状況、作品コンディション、梱包後の保管場所の環境についてなど、連絡を速やかに密に行うことで情報を共有し、一層の信頼関係を結ぶことが出来た。

## 収蔵庫の復旧

収蔵庫本室には、大量に所蔵する大型絵画作品(たとう箱に納めてある)をサイズ別に整頓し収蔵庫壁に床置きで立てかけていたが、4月15日に確認した緩やかな荷崩れは、16日の震災により悪化した。特に4-5月は余震が続き、収蔵庫内での作業には恐怖が感じられ手を付けられず、作品の自重で荷崩れは進行した。(図1)

収蔵庫内扉も破損し開閉不可能になり、ハンドル以下全て外して対応、気密性・安全性が低い状態が続いた。適合する部品の取り寄せにも長い時間がかかった。

5月中旬に収蔵庫整理計画案を挙げ、学芸員3

名と美術梱包業者3名で行う3日間の作業内容と計画し、6月中旬に実施した。庫内の床置き作品の積み直しと、絵画ラックより落下した作品の回収とコンディションチェックを実施した。



図1

IPMメンテナンス後とは言え、(高所作業になるため延期していた)収蔵庫の天井やハンガーラック上部に積もったダストが、全て床と作品に落ちたことは明らかであり、たとう箱の拭き取り、床清掃とラック清掃といったIPMクリーニングを行いながらの作業となった。

絵画ラック架けで保管していた作品の被害は以下の通りである。

・額が老朽化していたのか、振動で額本体の金具が外れて落下(図2)



図2

・額が老朽化していたのか、振動による額の破損  
・振動によるS管(小サイズ)の伸びによる作品落下(図3)



図3

・破損額のガラスが別の作品の画面を破損  
・固定が外れ移動した作品の額が別の作品の画面を破損

一方、荷崩れを起こした作品群については、たとう箱で保護していたこともあり、下敷きになった作品についても、たとう箱の部分破損はあったものの額・作品共に被害はほとんど確認されなかった(額裏のわずかな凹みが1点確認された)。この結果により、絵画ラックでの保管も、基本的には梱包が望ましいという方針を立てた。

復旧作業としては、整然と荷崩れしていた作品を整然と積み直し、壁の立て掛け作品については幅広の綾テープで壁に固定。絵画ラックは、フック固定と合わせラックに作品本体を綾テープや晒して固定した。

また、空調故障時には外気を入れて温湿度を調整したが、その影響として酸やアルカリに庫内の空気が偏っている恐れがあったため、パッシブ・インジケーターによる検査を実施。問題なかったため、現在用いている空気洗浄用フィルターを継続利用することとした。

## 被災作品のコンディションチェックと市民との情報共有

震災後、小企画展示室の展示スケジュールの変更を行うなかで、公開コンディションチェック展を実施した。大型作品については、今後の耐震向け展示方法などを実地で確認した。この期間中に、荷崩れの下敷きになった作品、たとう箱の一部破損作品など特に気になっていた作品58点を一気に確認し、作品の現状を把握していった。

続いて、年度末に当初より計画されていたコレクション展「CAMKコレクションvol.5 知っとるね？くまもとのお宝、大公開てばい！」(2017年2月18日～3月26日/32日間)においては、出品作品がすべて被災作品であること、被災作品のコンディションチェックが展覧会の重要な目的であると広報しながらの開催だった。出品作品62点(組作品が多いため、実質は130点超え)だったが、2016年度に確認出来たのは、200点にも満たない。当館所蔵作品は、約1400点であり、年間100点出品出来たとしても、14年間かかる計算である。

ミュージアムIPMの導入・継続・実施により、収蔵作品や環境の復旧について、最初の一步として不安なく適切な方向を選ぶことが出来たことは、まさに「やってて良かった、ミュージアムIPM」の一言に尽きる。今後も焦らずたゆまず活動を展開していきたい。

(富澤治子/熊本市現代美術館学芸班主査・学芸員)

\*1 本田光子「温湿度測定器の種類と特徴—文化財IPMの現場から—」、『平成27年度第37回文化財の虫菌害・保存対策研修会』、公益財団法人文化財虫菌害研究所、2015年6月、19頁。



震災の記憶や教訓を通して‘つながる’展覧会

3.11→4.14-16

アート・建築・デザインでつながる  
東北⇄熊本展

会期:2017年3月1日(水)～4月30日(日) 79日間

会場:ギャラリーIII、井手宣通記念ギャラリー

入場者:9,152人

熊本地震から1年のメモリアルとして実施。当時の熊本は、各地に仮設住宅が建つなど、復旧・復興に向けた歩みを続けていた時期であった。その中でふと感じたのは、やはりどうしても熊本のシンボルである熊本城に人々やマスコミの視線が集中し、それ以外の、特に当館がフィールドとする、現代的なアートや建築、デザインなどの分野における記録や紹介が手薄になっていることであった。

熊本地震からの復旧や復興に関わる、それらの分野をリサーチし始めた際に、共通して感じられたのは、「東北を始めとする過去の震災から得た記憶や教訓が次の被災地でのプロジェクトに活かされている」ということであった。私たちは、古からの災害、そして近年では、阪神淡路や中越、そして東日本などから得た知恵や経験を、次の世代へとつなげようとしてきた。これまで縁のなかった土地やそこで暮らす人々の思いや体験が、アートや建築、デザインを通して、私たちの‘生’に結びついていく‘つながり’について、本展では、5つのプロジェクトを通じて紹介した。





甲佐町白旗仮設団地の《みんなの家》模型



甲佐町白旗仮設団地《みんなの家》内観



日比野克彦 《ハートマーク・ビューイング》



ボランティア・アーキテクト・ネットワーク、慶應義塾大学SFC 坂茂研究室、熊本大学 田中智之研究室、熊本の建築家有志による《避難所用紙の間仕切りシステム》



東日本の皆さんから熊本に送られたハートマーク



日比野克彦 《ハートマーク・ビューイング@下通》



遠藤一郎《未来龍熊本大空風》



村上タカシ/MMIX Lab. 《宮城熊本 伝えるアートプロジェクト》



会場内での凧作りの様子



仮設住宅内の《みんなの家》で行われた村上タカシ/MMIX Lab.によるクリスマスプロジェクト



遠藤一郎によるメモリアルの凧あげ

## 他施設・異分野の受け皿として

熊本地震後、市内・県内の多くの文化施設が被災し、復旧までの休館を余儀なくされました。当館では、それらの施設に代わり、他団体からの被災地復興事業の受入れや、地域との連携を行い、美術文化に限らない様々な事業を実施しました。

日付	分類	内容	連携団体	参加者
5/19	音楽	On The Corner Karman ～流離う音楽～ 2016	STREET ART-PLEX KUMAMOTO実行委員会	80人
5/28	WS	コンドルズと遊ぼう～映画のあとはダンスだよ☆	公益財団法人 熊本県立劇場	40人
6/26	上映	プラネタリウム番組上映会 『くまモンのほしぞらおもちゃばこ』	熊本市立熊本博物館	300人
7/10	WS	熊本復興応援 マッチフラッグ ワークショップ in KUMAMOTO	下通繁栄会	200人
7/16	WS	熊本地震復興イベント 7月16日(土)は水前寺で遊ぼう!	水前寺活性化プロジェクトチーム	30人
7/23-24	WS	～子どもたちへ笑顔を～ レゴブロックで遊ぼう!!	レゴジャパン株式会社 熊本市子ども支援課	1,006人
7/29	音楽	エル・システマ弦楽四重奏団 佐渡裕指揮 スーパーキッズ・オーケストラ公演	公益財団法人 熊本県立劇場	630人
8/8	WS	美術家 金氏徹平ワークショップ	公益財団法人 熊本県立劇場	15人
8/12-14	WS	上通アートプロジェクト がんばるばい!上通チャリティ演劇まつり	上通商栄会 劇団さらら	490人
9/3-9/24 (内7日間)	音楽	復興応援チャリティコンサート「日本のしらべ」	熊本箏演奏者協会	350人
9/17	音楽	大江千里 ソロピアノ コンサート Music for Tomorrow in Kumamoto	note (株式会社 ピースオブケイク)	150人
10/10	上映	チャリティ上映会 『LIGHT UP NIPPON -日本を照らした奇跡の花火-』	菊池川流域さらくnet. LIGHT UP NIPPON実行委員会	92人
10/19	音楽	第11回南阿蘇 えほんのくに・笑顔をとどけるブルービーフェスタ 復興応援ピアノコンサート	南阿蘇えほんのくに 実行委員会	100人
11/14	上映	チャリティ上映会『うつくしいひと』	菊池川流域さらくnet. くまもと映画製作実行委員会	234人
2/8-3/6 (24日間)	展示	くまもとエンタメ支援金 チャリティーオークションアイテム展示会	(一財)mundef、熊本市	—
2/10	音楽	小野リサくまもとと支援ライブ	クマモトボッサ&ジャズクラブ	130人
3/3	音楽	特別授業 「音楽プロデューサー・ベーシスト 亀田誠治さんになんでも聞いてみよう!」	熊本市新ホール開設準備室	123人
3/8	音楽	音楽劇「リトル・ツリー」	Little Treeくまもと製作委員会	90人
3/7	音楽	ヤマカズが贈るミニコンサート in CAMK	公益財団法人 熊本県立劇場	90人
3/23-4/16	展示	NHK熊本×熊本地震 「熊本地震 被災地からの声」パネル展	NHK熊本放送局	—



# 地震から1年

## 未来に向けて文化にできること

地震発災からの1年間は地域文化の「受け皿」として、市民の「心の避難所」として、被災した方々が少しでもホッとできる場所に徹しようと美術館を運営してきた。地震から1年が経過すると、私たちを含め、被災した方々も少しずつ地震を客観的に振り返ることができるようになってきたように感じられた。

一旦閉館した美術館の再開館までの「復旧」期間、地域や市民の気持ちにできるだけ寄り添おうと考え続けた「心の避難所」としての期間、そして時が経過するにつれ、今回の地震の記憶を無駄にしないために、人々の「記憶」を「記録」し、「発信」する方向に自然とシフトしていった。

もちろん復興は続く。前を向いて一步を踏み出すための共感を促す企画展を交えながら、「未来に向けて、文化に何ができるのか」を考える日々はこれからも続く。



熊本地震1年のメモリアルとして願いをこめた連凧をあげた遠藤一郎<<未来龍熊本大空凧>>



文化財の被災状況と、それらを守るために奔走する人々の活動を紹介  
**熊本市被災文化財のいま**

会期:2017年5月4日(木・祝)~7月2日(日) 52日間  
会場:ギャラリーIII  
入場者:5,965人

2016年4月の熊本地震によって被害を受けた熊本市の文化財の現状と、その保護のための活動を紹介し、熊本城以外の市内の被災文化財についても市民の認知度と関心を高めることを目指した。

「熊本市記念館等 指定文化財被災状況」のパートでは、ジェーンズ邸や横井小楠記念館(四時軒)といった地震で甚大な被害が発生した市内の指定文化財について、回収された建物の部材や写真パネルの展示を行った。また本展では指定文化財だけでなく、個人所有の未指定文化財にもスポットを当てた。「資料救出の現場」のパートでは、震災発生以来文化財を守るために尽力してきた文化財レスキューの救出・保護活動を紹介した。また「城下町町屋の現状」では、解体と修復の岐路に立たされている新町古町の町屋の現状を紹介。所有者の葛藤や、町並みを守るために奔走する人々の動きを記録映像(RKK提供)で紹介した。この他、NHK熊本放送局の提供で、熊本城内の状況を360°映像で見ることができるVR体験コーナーも設置した。

会期中には、「市内文化財の現状と復旧の見通し」と「文化財レスキューの現場」をテーマに、熊本市文化振興課職員と熊本博物館学芸員をそれぞれ招いて講演会を行った。





「アニマルズ」で動植物園と美術館がつながる  
**三沢厚彦「ANIMALS in 熊本」**  
 関連企画「がんばれ!アニマルズ」

ワークショップ「動物の顔はめ看板で遊ぼう」

期日:2017年7月16日(土)  
 会場:熊本市動植物園 動物資料館前  
 ゲストアーティスト:アド(絵描き)

スペシャル・ギャラリートーク

期日:2017年8月20日(土)  
 会場:ギャラリーI、II  
 講師:上野明日香(熊本市動植物園獣医師)  
 坂本顕子(熊本市現代美術館学芸員)

講演会「熊本市動植物園はいま」

期日:2017年8月20日(土)  
 会場:ホームギャラリー  
 講師:上野明日香(熊本市動植物園獣医師)

「動物」をテーマとした三沢厚彦展に関連して、熊本地震で甚大な被害を受け、2018年4月の全面開園を目指して、復旧活動が続ける熊本市動植物園と協働し、動物や文化施設についての理解を深める企画を実施した。熊本地震から1年3~4ヶ月経た時期の企画であったが、同園内は液状化被害や猛獣舎などの破損が著しく、土日に部分開園が続ける状況であった。

「動物の顔はめ看板で遊ぼう」では、元動植物園スタッフのアーティスト、アドちゃんが描いた動植物園のカバ、キンシコウ、シフゾウの顔はめ看板に、人参で作ったオリジナルスタンプを押したり、顔はめ写真を撮って遊ぶワークショップを行い、多くの方に楽しんでいただいた。

また、スペシャル・ギャラリートークでは、同園の上野獣医師と学芸員の坂本がペアになって、獣医師は動物の生態について、学芸員は造形や表現について解説を行い、実際のワニの皮をさわったり、意外な動物の習性を知るなど、充実した内容のトークとなった。同日午後には、引き続き、上野獣医師に、地震後のデマ対策や動物たちの移送やケアなどの実態について、スライドを交えながら講演いただいた。動植物園スタッフの生き物に対する愛情や、文化施設としての使命について考える貴重な機会となった。



青ガエル、くすり湯…  
 震災前の熊本の生活の記憶と、今日々の暮らし  
**有田巧 熊本日々展**

会期:2017年7月5日(水)~8月27日(日) 47日間

会場:ギャラリーIII

入場者数:8,267人

フレスコ画による幻想的な画風で知られる熊本在住の洋画家有田巧の個展であるが、本展では、有田が2010年より展開している、熊本の古い建物や街並みを描いた水彩画作品群「熊本日々」シリーズを紹介した。このシリーズは、作家自身意図せぬうちに7年間、熊本の移り変わりを記録してきた側面を持つ。閉店した街角の老舗や熊本電鉄の車両「青ガエル」など懐かしさを感じさせる要素もある。熊本地震で被災し失われた街並みの景色もある。出品された水彩画36点のうち、描かれた場所の半分は既に存在していない。

2017年春、震災から1年が過ぎ、復旧・復興の工事が町のそこかしこで行われ、景色が日々変化している頃から展覧会に向けた準備が本格的に始まった。以前は有田も、被災後しばらくは町を歩くものの描く気持ちにはならないと心情を語っていたが、この打ち合わせ時に新作を発表したいと発言。本展でシリーズ最新作5点を発表した。

最新作は、なんとか震災を乗り越えた「ギックリ腰・営業中」の看板を掲げる古い建物や、小泉八雲ゆかりの「石仏」(震災で台から像が半回転したが匿名の人物に元通りに直され、小さな話題となった)など、ほんのりと明るい気持ちになる対象が描かれた。展覧会を通じ、来場者から「描かれた場所の地図が欲しい」という要望があった。新聞の特集記事として町並み保存活動が継続して取り上げられており、本展も魅力再発見の契機となったようだ。





特撮美術の技で蘇る熊本の誇り  
**熊本城×特撮美術**  
**天守再現プロジェクト展**

会期：2017年12月16日(土)～2018年3月18日(日) 75日間  
 会場：ギャラリー1・II  
 入場者：27,599人(速報値)

熊本出身の特撮美術監督・三池敏夫氏の指揮のもと、ミニチュア特撮の技で熊本城(天守閣・宇土櫓)を1/20のスケールで精巧に再現した。これとあわせて、城下の街並みをイメージしたミニチュアセットを製作し、熊本城を望むまちの風景を蘇らせた。(来場者はこのセットの中で写真撮影が可能。)ミニチュアセットの製作にあたっては、作業を補助する市民ボランティアを一般募集し、40名を超える方々が参加。セット内に配置する小物の製作や、ミニチュアビルの修復などでディテールアップを担っていただいた。この他、熊本城同様に地震で大きな被害を受けた阿蘇神社の楼門も、1/20のスケールで再現製作を行った。

会場内ではミニチュアとともに、熊本城に関する写真・映像や実物資料を展示し、全体を通観することで、熊本城の歴史や被災状況、今後の復旧計画までを理解できる内容とした。また熊本県内各地の状況にも目を向けてもらうため、熊本県と損保ジャパン日本興亜が制作している熊本地震デジタルアーカイブから各地の映像も紹介した。展覧会は全国レベルで多くのメディアの注目を集めたほか、SNSにおいても大きな盛り上がりを見せた。



# 川内倫子が撮った地震前の熊本

川内倫子《川が私を受け入れてくれた》は、当館で開催した同名の川内の個展(2016年)の際にコミッションワークとして新作発表された。全国公募によって熊本の思い出の場所・地名とその思い出の小話を寄せてもらい、川内がそこから選んで31件を取材し撮影した。本書では、熊本市内で取材した11件を掲載する。

選ばれた〈誰かの場所〉は、結果として「いつもながめている・ながめていた場所」、「家族に関連する場所」、「刹那の瞬間に心奪われた場所」のどれかにあてはまるものになった。いわゆる名所はわずかで、ほとんどがなんでもない場所である。だがその場所は、誰かの特別な場所である。

これらの作品群は、川内と他者が〈誰かの場所〉と小話を介して、共感と共有を根本として繋がり合い制作されたところに特徴がある。その根本の奥底には、〈誰かの場所〉と小話に秘められた、その人にとっての「真実」を深く尊重し共感した川内の姿勢がある。

地震後、熊本城長堀は修復中であり、カフェオレンジは大きな被害を受けて引越したが、生き活きと活動を展開し存在感をいや増している。

川内倫子(かわうち・りんこ 1972-)

写真家。滋賀県出身・東京在住。

2002年、写真集「うたたね」「花火」で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。2009年、アメリカ・ICP(International Center of Photography)の第25回インフィニティ・アワード芸術部門受賞。2011年に米Apertureとの共同出版で新作写真集『Illuminance』(日本版はフォイル刊)を世界五カ国で同時出版。2013年に写真集『あめつち』を世界3カ国で同時出版。2013年、芸術選奨新人賞受賞。主な個展に、2012年「照度 あめつち 影を見る」(東京都写真美術館、東京)、2016年「川が私を受け入れてくれた The river embraced me」(熊本市現代美術館、熊本)がある。











## 川内倫子 《川が私を受け入れてくれた》 撮影地一覧

主たる解説については、熊本市ホームページ「熊本駅周辺地域整備基本計画」、熊本市観光ガイド「ここに来るね、くまもと。」より転載、抜粋しました。

掲載された情報は、平成30年3月時点のものであり、現在も様々な復旧活動が続けられています。事前に情報等をよくお調べの上、足をお運びいただければ幸いです。



### 熊本市動植物園 表紙

江津湖に隣接し、孫悟空のモデルといわれる金糸猴などの珍しい動物を見ることができ。その他、熱帯植物が鑑賞できる大温室のある植物ゾーンや、観覧車などの遊具がある遊園地ゾーンも併設されている。

※熊本地震で甚大な被害を受け、現在は部分開園中。平成30年春の全面開園を目指し活動中。



### 熊本駅0番線ホーム P2-3

豊肥本線が主に使用する0番線ホームは、平成29年現在0A、0B、0Cの3つの乗り場があるが、今後、在来線の高架化や駅ビル建設に伴い、現在の形から変化していく予定である。

※平成30年3月をもって0番ホームは廃止となった。



### 熊本城長堀通り P7

国の重要文化財・熊本城の長堀(全長約242m)を眺めながら散策を楽しむことができる。春は桜の名所としても人気のスポット。

※平成30年3月現在、地震で傾いた堀をすべて解体し、部材を保管している。



### 熊本城 P65

熊本城は県内随一の桜の名所であり、桜の季節になるとソメイヨシノを中心とした約800本が見ごろを迎える。平成30年3月現在、熊本城内は入場が規制されているが、加藤神社や二の丸公園から、熊本城の復旧を応援するかのよう、咲き誇る桜を見ることが出来る。



### 本妙寺頓写会 P66

加藤清正の菩提寺・本妙寺で毎年7月23日に行われる。「頓写会(とんしゃえ)」とは、本妙寺第3代高麗日遥人が清正公の1周忌に写経を行ったところ、一夜にしてできたことから、「頓(すみやかに)法華経(69,384文字)を写経した法会」に由来する。頓写会の夜には参道に多くの露店が立ち並び、賑わう。

※平成28年、29年は仁王門の修復が未完のため、法要のみ実施。



### 江津湖 P67

江津湖は、上江津湖と下江津湖からなる。長さは2.5km、周囲6km、水面の面積は約50ヘクタール、一日の湧水量は40万トンにおよぶ。水道水源のすべてを地下水でまかなう、「水の都熊本市」を実感できる場である。街なかに隣接しながらも、希少な水草や野鳥が生息する。



### 水前寺成趣園 P68

桃山式の回遊庭園。三代藩主細川綱利公のときに庭園が完成し、中国・東晋時代の詩人陶淵明の詩「帰去来の辞」に因み、成趣園と名づけられた。東海道五十三次を模したといわれる庭園には、湖に見立てた池が配され、ゆるやかな起伏の築山とともに、庭園美を楽しめる。



### 熊本大学五高記念館 P69

熊本大学黒髪キャンパス内にある。1889(明治22)年に竣工。ラフカディオ・ハーンや夏目漱石が教鞭をとった第五高等学校、その後、熊本大学の教室棟として使用された。表門(赤門)等とともに国の重要文化財。現在は、「五高記念館」として利用されている。※熊本地震の影響により、当面の間休館。



### 坪井川遊水地公園 P70

加藤清正によって、熊本城の内堀として改修された坪井川は、熊本市の旧市街地を貫き、肥後藩の石工、橋本勘五郎の手による明八橋や明十橋などの石橋が現在も残されている。その上流に位置する、坪井川遊水地は、近年公園として整備され、市民の憩いの場となっている。



### カフェオレンジ/橙書店 P71

熊本市中央区練兵町にある書店。熊本地震前はプールのコート通りの一角で、一枚の壁を挟んでカフェ、書店として営業していた。川内倫子や村上春樹、坂口恭平など、様々な作家の展示や朗読会等を行い、伊藤比呂美が隊長を務める熊本文学隊の拠点であるほか、自主制作誌『アルテリ』を発刊するなど、文学と地域の読者をむすぶ場となっている。



### 京町坂 P72-73

豊前・豊後街道が通る、熊本城の北側に位置する。江戸時代は中上級武士の武家屋敷が立ち並び、その生活を支える商家が多く栄えた。京町は台地状の地形であるため、「観音坂」「中坂」など、熊本市内を遠く一望できる多くの坂が存在する。

川内倫子 《川が私を受け入れてくれた》 は全て熊本市現代美術館蔵

## 美術館を美術館として開ける、のか？

2016年の4月14日と16日、熊本をマグニチュード6.4、マグニチュード7.3の直下型地震が立て続けに襲った。震源の深さは10km、家の真下で何かが暴れているような、そんな感覚だった。

幸いなことに、熊本地震は前震、本震ともに夜間ということで観光地やショッピングモール等で被害に遭った人が居なかったこと、内陸部の直下型地震で津波を誘発しなかったことなど、他都市の大規模地震に比べると被害者の数は圧倒的に少なかった。

しかし、いきなり下から突き上げられるような、いつ終わるともしれない余震が4月末までに3,000回を超え、市民の大きなストレスとなっていた。

熊本市現代美術館の【場】としての特性をあげるとすると、まずは熊本で最も交通量の多い街の中心部に建つ複合ビルの中にあること、毎日20:00まで開館していること、そして館の半分が無料スペースであることだろうか。

数千冊の本が自由に（貸出はしていない）読める「ホームギャラリー」や、日本で唯一、美術館内にある地域子育て拠点施設として、子育てアドバイザーが常駐（10:00－15:00）している「まちなか子育てひろば」があり、自由に座ることができるソファがあちこちに設置してあるなど、「美術に触れる」という本来の目的以外で利用する人が多い。普段から待ち合わせや休憩に利用され、勉強している学生、打合せをしている人々やカップル等がエントランスにたむろし、ベビーカーを押したお父さんやお母さんが子育てひろばに向かう。子どもの泣き声が響き渡っていてもリピーターは誰も動じない……

そのような美術館である。

普段から上記のような【場】であった美術館のある「まち」が被災した時に、美術館が何を考え、どう動き、どう機能したのか、それを記したのが本書である。

大規模地震など、大きな災害に見舞われたまちは異様な状態である。水、ガス、電気といった現代人が当たり前のように享受しているライフラインが寸断され、物流も止まる。コンビニから食べ物が消え、トイレや風呂の利用にも不自由する。今の日本では考えられないような状況に突然追い込まれる。

翌日からは復旧支援のために自衛隊、設備や建築の復旧事業者の方々が大挙して熊本に入られ、道路は大渋滞となっていた。テレビでは連日地震の情報、青いテロップには、避難所、給水所、余震の情報等が絶えず流れ続けている。余震も続く。24時間、五感を地震に晒される。

そんな中、行政職員や自治会等の皆さんが、自分達も被災者であるにもかかわらず、市民の生活や安全を確保しようと奮闘する様子を見ながら感じた、役に立てないもどかしさや焦燥感、絶望感は今も忘れることができない。

「この場所にある美術館だからこそ、街を明るく活気づかせるためにも、美術館を美術館と開けるべき」

当初からこう主張したのは当館の館長である。

美術館の再開時期について具体的に議論したのは発災から約10日後、建物の被害規模による

が、電気は復旧、水は一部で復旧しはじめ、ガスはまだ復旧していないという頃のことである。児童館やモール等はまだまだ復旧の目処がたたず、学校も休校が続いている一方で、発災直後はほぼ全て閉店していた商店街では、何とか街の活気を取り戻そうと徐々に店舗が開き始めていた。

最初から全員が「美術館を美術館として開ける」という意見に心から納得していた訳ではなかったにしろ、みんな、市民のために何らかのアクションを起こさなければとは感じていた。

それがまずは、日常的に市民が利用していた【場】としての熊本市現代美術館、つまり、ホームギャラリーや子育てひろばを含む無料スペースの開館をめざそうという決定に繋がったのである。

何よりも背中を押されたのは、多くの市民からの問合せや励ましの声の存在だった。「いつ開館しますか」「展覧会はいつ再開するの?」という問合せに復旧の目処がたたないことを伝えると「がんばって」と励ましていただく。そんな電話が日に日に増えて、対応に苦慮するほどになっていた。

美術館を開館することに意味があるのか、アートに何ができるのか、被災した皆さんに嫌な想いをさせるのではないか……不安はたくさんあったが、開館すると決めたからにはどのようなスタンスで来館者を迎えるのかを全員で協議。スタッフも被災し、避難所生活や車中泊、マンションが立入禁止となり遠方の実家から通う者、自宅が半壊、液状化と無傷ではない。しかし、だからこそどんな【場所(空間)】・【時間(体験)】が必要とされているのかを本当に親身になって考えてくれた。

ホッとする場がほしい、気が向いたら参加できるくらいがいい、頭を使わずできることがあるといい、子ども達の行き場がなくて親も辛いと思う。家族や身近な人を思い浮かべながら館内を片付け、少しずつ準備を進めて迎えた初日、開館前から並んで下さる来館者の中にはベビーカーを押すお母さんの姿も。開けてよかった……と胸がいっぱいになった。

ここまでも記してきたとおり、当館は無料スペースを5月11日に開館。初日から200名を超えた来館者は、展覧会を再開すると急増。「地震で疲れている心を癒せた」「地震の片付けに終始する毎日の息抜きになった」「非日常感が味わえて心が安まった」「開けてくれてありがとう」と多くのメッセージをいただき、開館後もまた市民の言葉に励まされる毎日だった。

更に開館してしばらくすると、一緒に事業をしたいという相談が次々と舞い込み始めた。何とかして被災地を応援し、被災者を元気づけたいという気持ちで、県内外から持ち込まれる復興支援事業を受け入れる【場】として、当館は受け皿でもあった。多くの事業を受け入れた一方で、今の市民の気持ちに添わないとお断りしたのも一定数あった。その時その時の被災者の気持ちに寄り添いたい、喜んでもらいたい、ホッとしてほしい、元気になってほしいという気持ちが全ての活動の基準であり、原動力であった。

そうして1年が過ぎ、振り返ってみると、当館の入場者数は過去最高を記録していた。

今、どこかの都市で大規模災害が起こった際に、地方公共団体の業務継続計画（BCP：Business Continuity Plan）の中で、文化施設の開館・運営が非常時優先業務に特定されている都市があるだろうか。

あけすけな言い方をすれば、被災時にアートや文化の復興は色々なことが落ちついてからだとはほとんどの人が思っているだろう。そもそも防災計画を立てるときにアートや文化のことなど思いつきもしないかもしれない。

しかし、実際に震災を体験した館として、被災から間もないあの時、市民が地震をひととき忘れる【場】を切実に求めていたことをひしひしと感じた。

自宅に一人で居るのも怖い、避難所でずっと人の目にさらされるのも疲れる・・・、そんなときに、不特定多数の知らない人が近くにいる安心できるけれども気を遣わなくて良い匿名性の高い【場所（空間）】、地震のことを考えなくても良い、ひととき忘れられる【時間（体験）】が、心の安定のために必要だったのだと思う。

市民の生活は災害後も延々と続く。被災後の心のケアは毎回問題になるが、災害直後から被災者の心を避難させる【場】を作ることによって、もしかしたらその後長期にわたる「心の復興」のスタート地点が少しは変わってくる可能性はないだろうか。

応急対策業務やその周辺業務が全て終了してからのアートや文化の復興、文化施設の再開で良いのか。

この記録に残した「その時」の市民の動きや声に心を傾けてみてほしい。

昨年度は熊本地震後も国内外で大きな地震が数多く発生した。これを書いている今もイラン・イラクで地震が発生し400人以上の死亡が伝えられている。マグニチュード7.3、熊本の本震と同じ規模である。何もできない自分にまた胸が痛む。

これからも何処かで地震が起き、被災する街があるのは避けられないことだろう。その際にできるだけ被害の少ない震災に強い街を作ること、できるだけ早くライフラインや住環境を整え市民の生活を支えること、経済を建て直し街の元気を取り戻すこと、やらなければならないことはたくさんある。熊本県や市町村もそれぞれに復興計画を策定している。

しかし同時に震災では全ての人々が被災者である。心のダメージは被害の規模とは関係なく、誰もが傷ついていることを今回の地震で強く感じた。そのような中で、緊張から一時でも開放される【場所（空間）】と【時間（体験）】、謂わば「心の避難所」を無意識に多くの市民が必要としているのではないか。

文化施設もアートも、地震直後は何の役にも立てなかった。しかし緊張が続き、精神的な疲労も蓄積していく状況の中でこそ、いつでも立ち寄りてほっと一息つける場所として、いち早くすべての市民に対して開いていたい。そして、ここでの体験によって前を向くきっかけを得たり、リフレッシュしたりして、また日常と向き合う力を得てほしい。心からそう感じた。

美術館の存在意義や使命をこれほど強く考え続けた年はなかった。

そして、もしもまた災害が発生したときには「熊本市現代美術館」を「熊本市現代美術館」として開きたいと思っている。

東北も熊本も、今も余震が続いている。2017年9月末現在で、熊本の余震の数は4,400回を超えている。今だに余震のたびに怯えている人も大勢いる。

私たちが経験し、感じたことが、未来の被災者の一日も早い「心の避難所」の確保に繋がれば幸いである。

（岩崎千夏／熊本市現代美術館事務局次長）



2016年4月28日、復旧作業中のスタッフの笑顔

熊本地震記録集

熊本市現代美術館

# 地震のあとで After the Earthquake

本記録集では、美術館職員が撮影したスナップの他に、展覧会への出品等を通して、熊本を撮影した3人の写真家の作品を使用している。川内倫子は地震前の2014年から15年の熊本の様子、宮井正樹は地震直後の被害の大きかった西原村、石川直樹は地震後に徐々に復旧活動を始めた時期の写真である。

また、カバー等にプリントした数字は、地震により故障した空調の温湿度変化を示す。空調の故障によって、ダメージを受けるのは作品である。余震の中、展示中の作品を撤去して収蔵庫におさめ固定した。また、一部の作品は県外の空調のきいた倉庫へと移送した。この数字を見ると、「これ以上温湿度が変化しませんように…」とジリジリした思いでグラフを見つめていた日々を思い出す。

熊本の街では地震後、様々な変化が起こり、川内の撮った地震前の美しい熊本の姿をそのまま取り戻すことは難しい。

しかし、これらの記録を通して、人々の心の中の‘私の熊本’をいま一度思いおこし、新しい街の姿や日々の暮らしを築きあげていきたいという願いをこめて、掲載を行った。

謝辞／地震直後に連絡いただいた皆さま(順不同・敬称略)

池田和彦	田原誠也	植松由佳	森本早紀	平原奈津美	吉田直人	村上タカシ	宮崎真衣
山本耕一郎	永野康裕	三好寛	本田代志子	三瀧ゆかり	浜田詳一郎	村上隆	中尾優衣
多田幸子	松本教仁	江口寿史	山森英雄	柴田英昭	丹羽晴美	小川絢子	川口佳子
赤澤由紀子	岡田健	小川剛	日比野克彦	鈴木裕美子	鈴木佳子	黒田雷児	村松和明
前原孝志郎	中内勝	田尻浩章	日比野こづえ	西本宏至	那須光也	安田恭子	神山俊一
村上由起	長瀬夕子	金澤韻	日沼禎子	兼坂明宏	西本賢正	山本智代	青木朝吉
大桑仁	横田恵	ホー・ハンルー	川野邊渉	本田光子	塩原将志	田中ひろみ	
山川久	奥山ゆかり	吉本光宏	天野太郎	小林豊子	早川直己	大庭ほなみ	
青木貴之	井上幸	三池敏夫	永田賢正	建皇哲	田口美和	五十嵐理奈	

※上記以外にも、多くの皆さまからお見舞いや温かいお言葉を頂き、スタッフ一同、それを復興の励みとして活動して参りました。お名前を掲載できていない皆さまに関しましては、心より御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

発行：熊本市現代美術館  
 編集：坂本顕子(代表)、岩崎千夏、池澤茉莉、佐々木玄太郎、岡田直幸  
 執筆：桜井武、岩崎千夏、杉谷和泉、富澤治子、坂本顕子、岩崎美千子、池澤茉莉、佐々木玄太郎、岡田直幸、松本芳典  
 写真：宮井正樹(P14-I7)、石川直樹(P22-P33)、川内倫子(表紙、P2-3、P7、P64-P75)  
 ©Naoki Ishikawa ©Rinko Kawauchi ©Masaki Miyai  
 デザイン：吉本清隆デザイン事務所(吉本清隆、清原健太郎)  
 印刷：中央印刷紙工株式会社  
 発行日：2018年3月31日

熊本市現代美術館 Contemporary Art Museum, Kumamoto

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3  
 TEL:096-278-7500 FAX:096-359-7892

www.camk.jp

©2018 出品作家／著者  
 許可のない転写・転載・複製を禁止します。  
 All rights reserved. No part of this book may be reproduced or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, recording or any other information storage and retrieval systems without prior permission of the publisher and artists.

表紙作品：川内倫子 川が私を受け入れてくれた

39.0%	42.0%	29.2%	29.8%	41.0%	39.0%	31.2%	31.0%	37.0%	39.0%	27.2%	35.0%	50.0%	28.0%	50.0%	28.0%	47.0%	28.0%
40.0%	43.0%	28.3%	29.0%	42.0%	40.0%	30.9%	31.1%	31.0%	36.0%	27.2%	36.0%	56.0%	28.4%	50.0%	28.7%	47.0%	28.1%
42.0%	45.0%	27.8%	28.5%	43.0%	41.0%	30.6%	30.8%	37.0%	38.0%	27.2%	37.0%	57.0%	28.2%	50.0%	28.6%	47.0%	28.2%
43.0%	46.0%	27.4%	28.1%	44.0%	42.0%	30.6%	30.7%	37.0%	39.0%	27.1%	37.0%	57.0%	28.1%	50.0%	28.9%	47.0%	28.2%
44.0%	46.0%	27.1%	27.8%	45.0%	43.0%	30.4%	30.6%	37.0%	39.0%	27.1%	37.0%	57.0%	28.0%	50.0%	28.9%	47.0%	28.2%
44.0%	47.0%	26.8%	27.5%	46.0%	43.0%	30.3%	30.5%	38.0%	39.0%	27.1%	37.0%	57.0%	28.0%	50.0%	28.9%	47.0%	28.3%
45.0%	47.0%	26.6%	27.3%	46.0%	43.0%	30.2%	30.4%	38.0%	39.0%	27.1%	37.0%	57.0%	28.0%	50.0%	28.9%	47.0%	28.3%
45.0%	47.0%	26.4%	27.1%	46.0%	44.0%	30.0%	30.3%	38.0%	39.0%	27.1%	38.0%	57.0%	27.8%	50.0%	28.6%	48.0%	28.3%
44.0%	47.0%	26.1%	26.9%	46.0%	43.0%	29.9%	30.2%	37.0%	38.0%	27.1%	37.0%	57.0%	27.8%	50.0%	28.6%	47.0%	28.2%
44.0%	47.0%	25.9%	26.6%	46.0%	43.0%	29.8%	30.1%	37.0%	38.0%	27.1%	37.0%	57.0%	27.8%	50.0%	28.7%	48.0%	28.2%
46.0%	48.0%	25.8%	26.5%	47.0%	44.0%	29.7%	30.1%	37.0%	38.0%	27.1%	37.0%	57.0%	27.7%	50.0%	28.7%	48.0%	28.2%
46.0%	48.0%	25.7%	26.5%	47.0%	44.0%	29.6%	30.0%	38.0%	39.0%	27.0%	37.0%	57.0%	27.7%	50.0%	28.8%	48.0%	28.1%
45.0%	48.0%	25.7%	26.4%	47.0%	44.0%	29.6%	30.0%	37.0%	38.0%	26.9%	36.0%	57.0%	27.1%	54.0%	28.0%	50.0%	27.3%
45.0%	47.0%	25.9%	26.5%	46.0%	44.0%	29.6%	30.0%	37.0%	38.0%	25.8%	35.0%	57.0%	26.9%	55.0%	27.8%	50.0%	26.9%
45.0%	48.0%	26.0%	26.6%	47.0%	44.0%	29.7%	30.1%	37.0%	38.0%	25.8%	35.0%	56.0%	26.9%	55.0%	27.7%	51.0%	26.8%
47.0%	49.0%	26.1%	26.7%	48.0%	45.0%	29.8%	30.2%	38.0%	39.0%	25.8%	35.0%	56.0%	26.9%	56.0%	27.6%	52.0%	26.8%
47.0%	50.0%	26.3%	26.8%	49.0%	46.0%	30.0%	30.3%	38.0%	39.0%	25.8%	35.0%	56.0%	26.8%	55.0%	27.6%	53.0%	26.8%
47.0%	50.0%	26.4%	26.9%	49.0%	46.0%	30.0%	30.4%	39.0%	40.0%	25.9%	35.0%	56.0%	26.8%	55.0%	27.6%	53.0%	26.8%
47.0%	50.0%	26.3%	26.9%	49.0%	47.0%	30.1%	30.4%	39.0%	41.0%	26.1%	35.0%	57.0%	27.0%	51.0%	27.7%	51.0%	27.5%
44.0%	47.0%	25.9%	26.6%	46.0%	43.0%	30.0%	30.3%	37.0%	38.0%	26.2%	36.0%	56.0%	27.0%	53.0%	27.7%	51.0%	27.5%
44.0%	47.0%	25.7%	26.4%	46.0%	43.0%	29.8%	30.2%	36.0%	37.0%	26.3%	36.0%	56.0%	27.0%	53.0%	27.7%	51.0%	27.5%
44.0%	47.0%	25.6%	26.3%	46.0%	43.0%	29.7%	30.1%	36.0%	37.0%	26.3%	36.0%	56.0%	27.0%	51.0%	27.7%	51.0%	27.5%
47.0%	49.0%	25.5%	26.2%	49.0%	45.0%	29.7%	30.1%	37.0%	38.0%	26.3%	36.0%	56.0%	27.0%	53.0%	27.7%	50.0%	27.5%
46.0%	48.0%	25.4%	26.1%	47.0%	44.0%	29.5%	30.0%	37.0%	38.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.7%	50.0%	27.6%
46.0%	48.0%	25.3%	26.0%	48.0%	44.0%	29.4%	29.9%	37.0%	37.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.7%	50.0%	27.6%
45.0%	46.0%	25.2%	25.9%	47.0%	44.0%	29.4%	29.9%	36.0%	37.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.7%	50.0%	27.6%
46.0%	48.0%	25.2%	25.8%	47.0%	44.0%	29.3%	29.9%	36.0%	37.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
47.0%	49.0%	25.2%	25.8%	48.0%	45.0%	29.3%	29.8%	37.0%	38.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
47.0%	49.0%	25.1%	25.8%	48.0%	45.0%	29.3%	29.8%	37.0%	38.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
47.0%	49.0%	25.0%	25.7%	48.0%	46.0%	29.3%	29.7%	38.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
48.0%	50.0%	25.0%	25.7%	49.0%	46.0%	29.3%	29.7%	38.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
48.0%	50.0%	25.0%	25.6%	49.0%	46.0%	29.2%	29.6%	38.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	50.0%	27.6%
49.0%	51.0%	24.9%	25.6%	50.0%	47.0%	29.2%	29.6%	39.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	49.0%	27.5%
48.0%	51.0%	24.9%	25.6%	50.0%	47.0%	29.2%	29.6%	39.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	49.0%	27.5%
48.0%	51.0%	25.0%	25.6%	50.0%	47.0%	29.2%	29.6%	38.0%	39.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.0%	52.0%	27.6%	49.0%	27.5%
49.0%	51.0%	24.9%	25.7%	51.0%	47.0%	29.2%	29.7%	40.0%	40.0%	26.4%	36.0%	56.0%	27.2%	51.0%	27.7%	49.0%	27.6%
51.0%	51.0%	24.1%	25.5%	53.0%	48.0%	28.3%	27.6%	44.0%	42.0%	26.3%	36.0%	56.0%	26.9%	56.0%	26.9%	51.0%	26.2%
50.0%	50.0%	23.1%	24.8%	53.0%	46.0%	24.1%	26.3%	48.0%	44.0%	23.1%	36.0%	56.0%	25.4%	56.0%	25.8%	52.0%	24.9%
52.0%	50.0%	21.5%	23.7%	54.0%	46.0%	22.5%	25.1%	51.0%	45.0%	21.9%	36.0%	56.0%	24.9%	56.0%	25.1%	54.0%	24.2%
52.0%	51.0%	22.0%	24.0%	54.0%	47.0%	22.1%	24.5%	53.0%	47.0%	21.4%	36.0%	56.0%	24.5%	56.0%	24.6%	56.0%	23.7%
52.0%	50.0%	22.0%	24.0%	53.0%	47.0%	22.0%	24.3%	54.0%	48.0%	22.0%	36.0%	56.0%	24.4%	56.0%	24.4%	55.0%	23.6%
51.0%	50.0%	22.0%	23.7%	53.0%	46.0%	22.0%	24.0%	54.0%	49.0%	23.9%	36.0%	56.0%	24.4%	56.0%	24.3%	56.0%	24.2%
51.0%	51.0%	22.1%	23.8%	52.0%	46.0%	22.1%	23.8%	55.0%	50.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.3%	56.0%	24.3%	56.0%	24.2%
50.0%	53.0%	22.4%	23.4%	52.0%	50.0%	22.0%	23.8%	56.0%	51.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.2%	56.0%	24.3%	56.0%	24.2%
49.0%	48.0%	23.4%	23.7%	50.0%	49.0%	22.0%	23.8%	56.0%	51.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
48.0%	53.0%	24.0%	23.8%	49.0%	50.0%	22.0%	23.7%	56.0%	51.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
48.0%	56.0%	24.3%	23.8%	49.0%	51.0%	21.9%	23.7%	56.0%	51.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
47.0%	54.0%	24.6%	23.9%	48.0%	49.0%	21.9%	23.6%	56.0%	51.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
47.0%	56.0%	24.7%	24.1%	48.0%	50.0%	21.9%	23.6%	56.0%	51.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
47.0%	55.0%	24.9%	24.0%	48.0%	50.0%	22.0%	23.6%	56.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
47.0%	56.0%	25.0%	24.2%	48.0%	49.0%	21.9%	23.5%	57.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
47.0%	56.0%	25.1%	24.1%	47.0%	49.0%	22.1%	23.6%	56.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
46.0%	54.0%	25.1%	24.2%	47.0%	49.0%	22.1%	23.5%	56.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%
46.0%	56.0%	25.2%	24.0%	47.0%	50.0%	22.0%	23.5%	56.0%	52.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
46.0%	56.0%	25.3%	24.2%	47.0%	50.0%	21.9%	23.5%	56.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
46.0%	56.0%	25.3%	24.2%	47.0%	50.0%	22.0%	23.4%	57.0%	53.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
46.0%	54.0%	25.3%	24.5%	47.0%	49.0%	21.8%	23.3%	56.0%	52.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%
47.0%	49.0%	24.8%	25.4%	48.0%	49.0%	22.0%	23.4%	56.0%	52.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%
53.0%	52.0%	22.4%	23.8%	54.0%	48.0%	22.1%	23.4%	55.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%
55.0%	55.0%	22.2%	23.3%	56.0%	50.0%	22.0%	23.3%	55.0%	52.0%	24.0%	36.0%	56.0%	24.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.1%
56.0%	56.0%	22.2%	23.1%	57.0%	51.0%	22.0%	23.3%	56.0%	53.0%	24.1%	36.0%	56.0%	24.1%	56.0%	24.2%	56.0%	24.1%
55.0%	55.0%	22.2%	22.9%	56.0%	51.0%	22.0%</											